ウェイン・A.ウィーガンドと図書館史研究

－第4世代の牽引者－

川　崎　良　孝

Wayne A. Wiegand and Studies of American Library History

Yoshitaka KAWASAKI

抄録

アメリカ公立図書館史研究は、素朴な実証主義の第1世代、ジェシー・H.シェラ、シドニー・ディツィオンを中心とする民主的解釈の第2世代、マイケル・H.ハリス、ディー・ギャリソンを中心とする修正解釈の第3世代を経て、1980年代後半から第4世代の時代に入った。この第4世代の特徴は、1次史料の広範な渉猟、理論の適用や批判的解釈の重視、さらにプリント・カルチャーなどへの展開にある。この第4世代の研究の牽引者がウェイン・A.ウィーガンドであり、本稿はウィーガンドの研究の視点、方法、具体的な解釈の全体を明らかにする。

キーワード：ウェイン・A.ウィーガンド、アメリカ公立図書館史研究、批判的図書館史研究、プリント・カルチャー、専門職

はじめに

アメリカにおける図書館史研究の歴史をみると、4つの世代に大きく分けることができる。まず、第1世代の図書館史研究は1850年から1930年までである。アメリカ図書館史についての最初のまとまった単行書、すなわちジョサイア・クウィンジー（Josiah Quincy）が1851年に発表した『ボストン・アセニアムの歴史』[1)]が起点となる。この業績は単館史、記念誌型、客観的事実史と網羅性、発展史、過去への回想、アイデンティティの形成という要素を備えていた。そののちに発表された図書館史関係文献は多分にこうした要素のすべて、あるいはいくつかを備えていた。クウィンジーが描き上げた歴史は、図書館史学の出発点であると同時に、第1世代による図書館史記述の典型と考えてよい。これはまた素朴な図書館史記述の時代であった。

第2世代は革新主義図書館史学といわれたりするもので、1930年から1970年代初頭までである。代表とされる研究者はジェシー・H.シェラ（Jesse H. Shera）とシドニー・ディツィオン（Sidney Ditzion）である。ここではシカゴ学派の図書館史学が中心となる。すなわちアーノルド・K.ボーデン（Arnold K. Borden）が設定し、ピアス・バトラー（Pierce Butler）によって図書館学の中に位置づけられ、ジェイムズ・H.ウェラード（James H. Wellard）やカールトン・B.ジョッケル（Carleton B. Joeckel）によって部分的に展開された研究である。そしてミクロな図書館史研究はガウレディズ・スペンサー（Gwladys Spencer）のシカゴ公

立図書館史の研究[2]、マクロな図書館史研究はシェラの『パブリック・ライブラリーの成立』(1949)[3]で完成の域に達する。またマール・カーチ（Marle Curti）の系譜からは、シドニー・ディツィオン（Sidney Ditzion）が1947年に『民主主義と図書館』[4]を発表した。シェラとディツィオンは、研究の背景、扱う時代や地域、それに視点は大きく異なるものの、概して民主的解釈と呼ばれている。すなわち下からの要求を理解ある上層部が受入れて、公立図書館は成立し発展してきたというのである。この民主的解釈は1970年代初頭まで、アメリカ公立図書館の成立と発展についての唯一の包括的解釈として君臨した。

第3世代は修正解釈派といわれるが、1973年から開始される。代表とされる研究者はマイケル・H.ハリス（Michael H. Harris）とディー・ギャリソン（Dee Garrison）である。代表的な業績は、ハリスが1973年に発表した論文「アメリカ公立図書館の目的：修正解釈者の歴史解釈」[5]、およびギャリソンが1979年に発表した『文化の使徒：公共図書館・女性・アメリカ社会、1876-1920年』[6]である。いずれも公立図書館を社会統制（社会秩序の維持）のための機関と把握して、特にハリスは第2世代の民主的解釈を強く非難した。またギャリソンは、通史としての図書館史研究に初めて女性を本格的に登場させたが、専門職の確立という観点から女性図書館員の増加を否定的に解釈した。

こうした第1、第2、第3世代の図書館史研究については、筆者が学説史という形で、学派の生まれた背景、重要な研究者とその解釈、および解釈の問題点をまとめてきた。そして、歴史の動き、歴史学の変化、教育史学の変化などと、図書館史学との関連について明らかにしてきた。

ところで、とくに1980年代後半に入って、基本的にはハリスの問題意識を根底に持ちながらも、単に社会統制（社会秩序の維持）という一般的な説明に終始せず、人種、階級、ジェンダーといった視座を持ちつつ、図書館界や図書館内部にみられる対立、調整を解明することで、図書館の歴史を明らかにしていくという方向がみられるようになった。そのことによって、民主的とか社会統制的という解釈よりも、より厚みのある解釈と研究が出現するようになってきた。またこうした特徴を持つ研究は、これまで図書館や図書館史で暗黙の前提とされてきた解釈を捉え返すという方向にも向かっている。さらに急速に発展してきたプリント・カルチャーやブック・ヒストリーなどと結びつきを持とうともしている。この種の研究や研究者を第4世代の研究や研究者と名付けてみた。この第4世代の代表的な研究者は、ウェイン・A.ウィーガンド（Wayne A. Wiegand）、アビゲイル・ヴァンスリック（Abigail VanSlyck）、さらにはクリスティン・ポーリー（Christine Pawley）などである。代表的な業績としては、ウィーガンドの『司書職の出現と政治：アメリカ図書館協会 1876-1917年』(1985)[7]、『プロパガンダのための積極的な手段：第1次世界大戦下のアメリカ公立図書館』(1989)[8]、『手に負えない改革者：メルヴィル・デューイの生涯』(1996)[9]、ヴァンスリックが1995年に発表した『すべての人に無料の図書館：カーネギー図書館とアメリカ文化　1890-1920年』[10]、ポーリーが2001年に発表した『中部辺境地域での読書：19世紀末のアイオワ州オーセージにおけるプリント・カルチャー』[11]などである。

この3名をみると、ヴァンスリックはコネティカット大学の美術史学部に籍を置き、建築史

や建築デザインなどの教育や研究に関わる建築学コースの責任者である。ヴァンスリックの研究領域はアメリカ建築と建築におけるジェンダー問題、特定の土地における固有の建築と文化景観学、子どもの空間、図書館建築などであり、19世紀と20世紀のアメリカの公共建築を主たる分析の対象とする。方法論としては建築物への文化社会学アプローチを取っている。すなわちヴァンスリックは建築史や建築デザインの研究を主とし、その1つの領域として図書館を取り上げたのであり、図書館や図書館史自体に主たる関心があるとはいえない。またポーリーはウィスコンシン大学でウィーガンドの指導の下に博士論文を執筆し、それが単行本になった。そののち独自の分野や問題意識で単に図書館史だけでなく、図書館学教育などへの発言を行っている。

こうした点で、3名の中で図書館史研究の牽引者はウィーガンドと考えるのが妥当であろう。1967年から2002年までの図書館史研究、とりわけ『ライブラリーズ・アンド・カルチャー』の文献を量的、質的に分析するとともに、主要な研究業績を紹介したエドワード・A.ゴデケン（Edward A. Goedeken）は、「この30年間にわたって、ウェイン・A.ウィーガンドは図書館史研究の傑出した研究者および主たる旗振り役として、図書館史研究の方法論の向上にむけて尽力してきた」[12]と述べている。本稿は、1980年代後半からの第4世代の図書館史研究の牽引者ウェイン・A.ウィーガンドの図書館史研究を取り上げ、その全体像の解明を目的とする。ウィーガンドは1970年にウィスコンシン大学ミルウォーキー校で歴史学修士、1974年には南イリノイ大学で歴史学博士、同年にウェスタン・ミシガン大学で図書館学修士を獲得している。そして図書館学の教員としてケンタッキー大学、ウィスコンシン大学につとめ、現在はフロリダ州立大学でF.ウィリアム・サマーズ（F. William Summers）図書館情報学教授職、およびアメリカ研究の教授である。第1章ではウィーガンドの研究の視点と方法を扱い、第2章ではウィーガンドの具体的な研究業績を主要な単行書を取り上げてかいま見る。そして第3章ではウィーガンドの図書館史研究についてまとめておく。

1　ウィーガンドの図書館史研究の視点と方法

ウィーガンドの図書館史研究の視点と方法については、大きく以下の3点にまとめられよう。

(1) 文書館資料、手書き資料など1次史料の渉猟にもとづく図書館史研究
(2) 図書館、図書館史を理解する基本的な枠組みの設定
(3) 図書館史研究が目指す方向としてのプリント・カルチャー史の重視

1.1　1次史料にもとづく図書館史研究

1973年、ウィーガンドはウェスタン・ミシガン大学の図書館学修士課程に属していたのだが、その時期に図書館史の文献に目を通したという。大多数の図書館史の文献に印象づけられることはなかった。少数の例外はともかく、大多数は図書館の分析ではなく、図書館の賛美であった。また大多数が第2次資料や、すぐれた研究図書館なら所蔵している刊行された1次史料を使っていた。文書館などにある手書き資料などを用いた業績はほとんどなかった。また視野が狭く、図書館を囲む社会的環境をみてはいなかった。そうした業績が無駄というのではないが、大し

た展望を与えるものではなかった。続いてウィーガンドは次のように書いている。

> アメリカ史研究の博士課程を経験して、1次史料（それがどこに存在しようと）の徹底的研究が重要だと教えられてきた。そして、そうした研究の結果をアメリカ史研究文献のいっそう広範な業績と結びつけることを学んだ[13]。

ウィーガンドによると、歴史研究は現在の理解を深めることにあり、それは図書館の将来計画の作成に貢献できる。したがって賛美型の図書館史記述ではなく、批判的分析が図書館史研究に不可欠である。また1次史料にもとづく研究、歴史研究の業績として耐えられるものでなくてはならない。1977年から1989年に発表された図書館史の文献について、ウィーガンドは『ジャーナル・オブ・ライブラリー・ヒストリー』、およびその後継誌『ライブラリーズ・アンド・カルチャー』で文献展望を行った。最初の文献展望は1977・1978年に発表された文献の展望であるが、そこでは依然として賛美型の業績が多く、批判的な業績が少ないこと、そして研究の質を上げる必要があることを訴えている。続く1979・1980年、1981・1982年および1983・1984年の文献展望でも、1次史料の活用と、社会科学の理論の適用を主張した[14]。そして特に前者についてはウィーガンド自身によって範が示されることになる。すなわち1986年刊行の『司書職の出現と政治：アメリカ図書館協会 1876-1917年』、1989年の『プロパガンダのための積極的な手段：アメリカ公立図書館と第1次世界大戦』、それに1996年の『手に負えない改革者：メルヴィル・デューイの生涯』によってである[15]。ウィーガンドは徹底的な1次史料の研究によって、10年間に3冊の研究書を刊行した。それもアメリカ図書館協会、第1次世界大戦期の図書館活動、それに図書館界の大人物メルヴィル・デューイといった重要な事柄や人物を取り上げるとともに、従来の研究とは相違する批判的観点を中心に据えたのである。そのことによって、ウィーガンドは図書館史研究の第1人者として認められただけでなく、その研究方法、すなわち批判の重視と1次史料の徹底的活用は図書館史研究の共通の基盤になっていった。

1.2　図書館、図書館史を理解する基本的な枠組みの設定

上述のようにウィーガンドは批判の重視と1次史料の徹底的活用を主張し実践したのだが、ウィーガンド自身は図書館史を研究する場合にどのような枠組みで図書館現象をみているのであろうか。この点に関して、ウィーガンドは1986年に図書館現象を分析する独自の枠組みを発表し、それは一過性ではなく現在まで一貫している。これは図書館を考察する場合の包括的な枠組み、あるいはウィーガンドが図書館を考える場合の構成要素といえる。と同時に図書館研究や図書館史研究についてのウィーガンドの問題意識を窺わせる内容になっている。

ところでウィーガンドがそうした枠組みなり要素を構想したきっかけは専門職の研究からである[16]。現在もよく使われるが、ある職業が専門職になる要件として、知識基盤とそうした知識の適用、大学での教育（特に大学に付属した専門職大学院での教育）、物質的利益よりも社会全体への奉仕（愛他精神）、専門職団体の存在、倫理綱領の制定といった特性が挙げられてきた。これはいわゆる特性理論といわれるもので、早くも1933年にカーーサンダース（Carr-Saunders）らがこうした要因を列挙している[17]。

ウィーガンドよると、司書職は他の専門職と同じように19世紀後半から成長し、司書職は上

記のすべての要件を充足している。しかし司書職は専門職と呼ばれるものの中で地位が低く、常に給与面では最下位に位置する。その理由を探るに際して、ウィーガンドは戦後に提起されてきた専門職論を振り返り、大まかに4つの見方があると確認した。すなわちしばしば参照される特性理論では専門職としての司書職を説明できないということである。

まずタルコット・パーソンズ（Talcott Parsons）を代表とする機能主義理論である[18]。特性理論とは対照的に、機能主義のアプローチは特性の獲得を中心におかず、ある職業が特定の社会的役割を果たすようになる過程を中心に据える。この理論によると、専門職の機能は専門家と助力を求めるクライアントとの関係のコントロールにある。ウィーガンドによると、この定義では司書職はまさに専門職である。参考業務に携わる図書館員は専門家とクライアントとの関係を実際にコントロールしている。しかしほとんどの人はこのことを認知していないし、さらにこのコントロールを医者や法律家と同等と考えている人はいっそう少ない。こうした点でウィーガンドは機能主義理論を退けた。

第2番目はハロルド・ウィレンスキー（Harold Wilensky）が代表する構造主義理論である[19]。この理論は機能よりも構造を重視するもので、これは特性理論の諸要因を活用することになる。この理論では発展段階というプロセスが重視される。大学での教育、専門職団体の形成、免許制度の確立、倫理綱領の制定などの進展過程を重視する。したがって専門職にいたるプロセスを専門職化の過程として把握する。ウィーガンドによると、この場合、司書職は免許制度が十分に確立されているとはいえない。したがって専門職として十分に成熟しておらず、専門職の過程にあると把握される。この理論は実質的に特性理論と重なる部分が大きい。

第3番目は1970年代の中頃から提起されてきた理論で、マガリ・ラーソン（Magali Larson）が代表する職独占理論である[20]。職独占理論は構造を認めるのだが、そうした構造的な要因は職を支配し、権威を行使し、業務をコントロールするために創造されたものと主張する。したがって専門職の地位を達成するグループは、そのグループの社会での地位と力に比例すると論じる。これはマルクス主義の視点から専門職を考察した理論である。ウィーガンドによると、例えば参考図書館員はすべてアメリカ図書館協会認定の図書館学校の修士号を持たねばならないといった措置を講じると、これは職独占理論に適応することになる。と同時に図書館界ではラーソンの理論は広く受容されないだろうと指摘した。

そして最後が1980年代に入って提出されてきた諸理論で、アンドリュー・アボット（Andrew Abbot）やポール・スター（Paul Starr）を代表とする[21]。そしてウィーガンドはこの最新の理論が図書館や司書職の分析に有用だと主張する。アボットは専門職の「管轄領域」（jurisdiction）という考えを提出した。アボットによると、専門職は真空の中に存在するのではなく、相互に依存するシステムのなかに存在し、各専門職は「管轄領域」を持っている。そして現在の専門職を理解するには、こうした「管轄領域」の発展を吟味しなくてはならない。ときに複数の専門職が「管轄領域」をめぐって争い、勝利したり敗退したりする。バーバラ・メロシュ（Barbara Melosh）は専門職の「仕事文化」をみるように主張し、トマス・H.ハスケル（Thomas H. Haskell）は専門職の「専門技量」に注目を求めていた[22]。アボットによると、文化的には専門職は己の専門技量にたいして、全般的な文化の正当性という価値、それ

に合理性、効率性、科学性という価値を高めることで、自分たちのコントロールを正当化する。またスターは最も個人的な水準での力の源泉は依存にあると考える。専門職の力の主たる源泉は知識と能力（competence）にあるとし、そうした力の所有には、専門職の「主権」（sovereignty）が必要であるとした。その場合、「主権」は社会が当の専門職に授けた権威（authority）によって明示される。スターによると、この「権威」には効果的なコントロールの2つの源、すなわち「正当性」（legitimacy）と「依存性」（dependence）という源が組み込まれている。「正当性」はクライアントの服従（obedience）を必要とし、「依存性」はもしクライアントが服従しないならば、「悪い結果」（foul consequence）が生じるというクライアント側の恐怖に依拠している[23]。ウィーガンドはこの論理の流れは法律や医学には適用できるが、図書館にはあてはまらないと考える。参考図書館員の助言に服従しなくても、利用者（クライアント）は何の恐れも感じないからである。しかしながらスターは「文化的権威」（cultural authority）という言葉を使って、この「権威」という概念をさらに進展させる。この言葉「文化的権威」は、「リアリティについての特定の定義や、意味や価値における判断が、有効で真実として広く流通する蓋然性（probability）」[24]を示す。

ウィーガンドはこの「文化的権威」に注目し、そうした権威は聖書、参考図書、地図、研究書といった物体（objects）によっても行使されうるというスターの論を取り込む[25]。ウィーガンドは、そこから図書館を包括的に説明できる要素を考察する。この「文化的権威」を正当化しているのが図書館という「インスティチューション」で、「インスティチューション」は図書館の施設、制度、管理、サービスを含み、とりわけ公立図書館は公費で支えられている。そして「文化的権威」と「インスティチューション」の中継ぎをするのが図書館員の「専門技量」（expertise）である。さらにウィーガンドは図書館員の「性格」（character）を加えて、図書館を理解し分析する場合の4つの構成要素とした。「権威」、「インスティチューション」、「専門技量」、「性格」という要素で図書館を理解し分析するというウィーガンドの姿勢は、この枠組みを発表した1986年論文からアメリカの学校図書館史研究の必要性を訴える2007年論文、および現在まで一貫している[26]。

1.3　図書館史研究が目指す方向としてのプリント・カルチャー研究の重視

既述のように、ウィーガンドが「1次史料にもとづく図書館史研究」の必要性を痛感したのは、図書館史研究を開始した当初からであった。そして1977・78年から1987・88年に発表された図書館史関係文献の文献展望で、その重要性を繰り返して強調していた。それは1979年夏期号から1990年秋号までの『ジャーナル・オブ・ライブラリー・ヒストリー』（『ライブラリーズ・アンド・カルチャー』）に相当する。同時に1986年から1996年の10年間にウィーガンド自身が見本を示す重厚な著作3冊を発表し、この側面は図書館史研究で定着した。次に「図書館、図書館史を理解する基本的な枠組みの設定」、すなわち図書館現象を分析する場合の基礎的要素としての「権威」、「インスティチューション」、「専門技量」、「図書館員の性格」については、1986年の『ジャーナル・オブ・エデュケーション・フォア・ライブラリー・アンド・インフォメーション・サイエンス』に掲載された論文が最初で、ウィーガンドはそこで設定した手法を

現在まで継続して適用している。しかし本項目が扱うプリント・カルチャー研究の重視については、上記とは状況が異なる。これは方向を設定した典型的な文献を指摘するのが困難というのではない。むしろ、文献でのプリント・カルチャー研究の重要性や必要性の主張よりも、研究のための組織作りを先発させたことによる。

1.3.1 ウィーガンドによるプリント・カルチャーへの言及の開始とプリント・カルチャー研究の全体像

ウィーガンドの図書館史文献展望をみると、1981・82年に発表された図書館史に関する文献展望では、その結論部分で「女性（図書館）史研究には一定の進展があった」[27]と記し、1983・84年に発表された図書館史の文献展望では新たに「アメリカ図書館史における女性」という項目を設けている[28]。このことは新しい研究分野の業績を積極的に取り込むというウィーガンドの姿勢を示している。しかしウィーガンドが最後に担当した1987・88年に発表された文献を取り上げた1990年の文献展望でも、プリント・カルチャーやブック・ヒストリーといった項目は立てられていない[29]。このことはプリント・カルチャーへの図書館史からの接近が少なくとも研究業績という面では出現していなかったことを示している。しかしながら、一連の文献展望においてウィーガンドは進展しつつあるプリント・カルチャーにまったく言及しなかったのではない。ウィーガンドは1985・1986年に発表された文献を展望した1988年の『ライブラリーズ・アンド・カルチャー』で次のように述べている。

> アメリカ図書館史を証拠づける（documenting）1次史料は全国の図書館の文書館で活用されずに眠っている。アメリカ史全般における図書館の役割は多分に解明されずに残っている。したがってアメリカ文化史、文学史、社会史、インテレクチュアル・ヒストリー、ブック・ヒストリーといった分野の研究者の協力を求めることは、アメリカ図書館史研究のコミュニティにとって実利がある[30]。

簡略に述べれば歴史研究の方法の点で進んでいる上述の各分野から協力を求め、図書館史研究の進展を求めるという内容で、あくまで図書館史研究を中心に据えている。ところで引用文中の「ブック・ヒストリー」に注目する必要がある。この分野は単に図書の形態の歴史などを扱うのではない。1978年に連邦議会は議会図書館に図書研究センター（Center for the Book）の設置を認めた。このセンターは読書の促進を目的にするが、図書に関する研究も支援することになる。また図書の歴史的研究については、アメリカ好古協会（American Antiquarian Society）が1983年に開始した「アメリカ文化におけるブック・ヒストリー」プログラムが積極的な活動を実施していた。同協会はプリント・カルチャー史の拠点になり、重要な研究書がのちに輩出することになる。2000年に議会図書館の図書研究センターはロナルド・J.ツボレイ（Ronald J. Zboray）の図書『アメリカにおけるブック・ヒストリーに関するハンドブック』を刊行した。このハンドブックは、ブック・ヒストリー研究の領域や資源の所在などを示した簡便なマニュアルである。そこでツボレイはブック・ヒストリーという分野について次のようにわかりやすく説明している。

> ブック・ヒストリーに関わる諸学問分野は次の理解を共有している。印刷物が過去に関して直接的な洞察を与えるのではなく、そうした洞察は調停（mediate）される。すなわ

ち、意味は印刷されたページを通して、作者の精神や頭脳から読者の精神や頭脳に直接的に伝わるのではなく、仲介（intervention）あるいは調停によって生み出される[31]。

例えば作家は市場を意識して執筆し、編集者や出版者は作家の作品を図書の形態に形作ったり、装丁や流通を決定する。書店は買い手の目につくように展示する。そして最後にさまざまな読者がさまざまに図書を読み理解する。図書が読まれる頃には、図書は多くの調停をくぐり抜けている。ブック・ヒストリーの研究者は主たる研究の目的をそうした調停の解明に置いている。というのは、活字資料の作成者、流通者、消費者の調整が、社会が意味を生み出す方法に洞察を提供するからである。

1980年代からアメリカではプリント・カルチャー、ブック・スタディーズ、リーディング・スタディーズなど言葉はともかく、図書や活字、さらに読書に関する学際的な研究領域が急速に伸びてきた。プリント・カルチャーの研究や研究領域は非常に多様であるが、元をたどればアナール派や書物の歴史（*histoire du livre*）の研究に源を持ち、さらに英米での分析書誌学を加えたものといえよう。ハーヴァード大学教授で図書館長、そして18世紀のフランス文化史の高名な研究者、さらに図書の歴史（the history of the book）の開拓者とされるロバート・ダーントン（Robert Darnton）は、有名な「伝達サーキット」(communication circuit）という図を提示し、この研究分野の全体像を示した。ダーントンは、人のグループに注目し「作者」(Author）←→「出版業者」(Publisher）→「印刷業者」(Printers）→「荷送り人」(Shippers）→「書籍販売業者」(Booksellers）→「読者」(Readers)、そして「作者」(「読者」から「作者」へは点線の矢印）へと循環することを示している。また「印刷業者」には紙やインクなどの「供給者」が関わり、「読者」には「製本業者」がつながっている。さらにサーキットの中心に、それらすべてに影響を与えるものとして、「経済情況と社会情況」を中心に、それと部分的に重なる形で「政治的承認と法的承認」および「知的影響と宣伝」を置いている[32]。

ツボレイが示したブック・ヒストリーの概念は、このロバート・ダーントンなどのサーキットの考えと軌を一にしている。事実、ツボレイはこうした領域を「生産者」、「流通者」、「消費者」にまとめ、「消費者」には「読者」や「消費する機関」などが入る。さらに「消費する機関」では図書館、学校を項目とし、その他として宗教団体、企業、政府機関を挙げている[33]。このようにブック・ヒストリーは広範な研究分野で、そこに図書館史も入る。ウィーガンドの1988年の言及は、ブック・ヒストリーやプリント・カルチャーとの関係に触れた最も初期の言及であろう。

1990年にウィーガンドは「合衆国における図書館史研究」でプリント・カルチャーに触れた[34]。まず図書館学や図書館史研究が図書館界の内部で完結していること、同時に他の分野の業績が図書館界では紹介されていないことを指摘した。それがために、図書館学や図書館史の研究は学際的な相互利益という豊かな可能性を閉ざしているのである。ウィーガンドが例としてあげたのは、読者反応理論の研究と文学や文化の規範の創造、維持、影響に関する研究の2つである[35]。なお例えば前者は作品の意味は各読者によって相違するという理論であり、社会的行為としての読書というとらえ方を導き、ここに従来からの文学批評を超えた学際的な領域

が出現する。

さらにウィーガンドは「アメリカの図書館史研究者にとりわけ有望にみえる学問上の分野が浮上してきている。それはアメリカ史における図書の研究である」[36]と指摘した。図書館学校における従来の扱いは「図書と印刷の歴史」という科目であり、そこでは物としての図書と技術としての印刷に焦点をあてていた。しかしアメリカ好古協会が1983年に開始した「アメリカ文化におけるブック・ヒストリー」プログラムの場合、図書の研究は経済的、社会的、文化的、それに知的歴史と関連づけて研究する必要があるとの前提で出発し、積極的な活動を実施していた。こうしたブック・ヒストリーという上昇機運にある領域で、図書館史研究者は貢献できるし、また他の分野の研究者から助力を得ることもできる。以上のように1990年頃をみると、プリント・カルチャー史やブック・ヒストリーについての単なる指摘にとどまり、内容のある記述を展開してはいない。

1.3.2　プリント・カルチャー研究の組織とウィーガンド

そののち主要図書館研究雑誌におけるプリント・カルチャーやブック・ヒストリーへの言及は途絶える。その理由の1つは1989年の『プロパガンダのための積極的な手段』の刊行後、1996年に刊行される『手に負えない改革者』の準備にかかっていたからであり、さらには文献展望や事典などの編纂に関わっていたからであろう[37]。しかし同時にこの時期にウィーガンドはプリント・カルチャーの研究に関わる組織作りを中心に活発な活動を続けている。アメリカでのプリント・カルチャー研究の成長は1991年に「著述、読書、出版の歴史研究協会」(Society for the History of Authorship, Reading, and Publishing, SHARP）の成立が1つの契機をなす。そしてSHARPは1998年に学術雑誌『ブック・ヒストリー』を刊行するまでになった。1992年にはペンシルヴァニア州立大学が学際的なブック・ヒストリー研究センター（Center for the History of the Book）を設置し、同年にウィスコンシン大学とウィスコンシン州歴史協会（State Historical Society of Wisconsin）が協力して現代アメリカ・プリント・カルチャー史研究センター（Center for the History of Print Culture in Modern America）を発足させている。後者の設置に際しての中心人物はウィスコンシン大学のウィーガンドとリテラシーの研究で有名なカール・カエスル（Carl Kaestle)、およびウィスコンシン州歴史協会のジェイムズ・P.ダンキー（James P. Danky）であった。この種の研究グループの設置は広まり、議会図書館の図書研究センターがこれらの動きを支援した。また、プリント・カルチャー史研究の拠点アメリカ好古協会は1993年に全米人文学財団（National Endowment for the Humanities）から25万ドルの補助金を獲得し、プリント・カルチャーの歴史研究を大いに刺激したのである。

現代アメリカ・プリント・カルチャー史研究センターがいう「現代」とは大まかに1876年以降を示す。このセンターの目標は例えば以下である[38]。

- 大学でプリント・カルチャー史についての学際的研究を促進する。現代アメリカ史の全国の研究者がプリント・カルチャーを研究する拠点となる。その場合、文学、社会学、政治学、ジャーナリズム、教育学、読書と図書館史、科学史、ジェンダー研究やエスニック研究といった多様な分野からの研究者が関係する。

・プリント・カルチャーの研究を促進するために、図書館システムおよび研究蔵書についての研究を助ける。
・歴史的に周縁に置かれてきたが、少ない表現手段として活字資源を用いたグループのプリント・カルチャーにたいする研究を促進する。すなわちジェンダー、人種、職、エスニシティ、性的志向などで周縁に置かれてきたグループである。
・アメリカ好古協会のプログラム、議会図書館の図書研究センターをはじめとする機関と協力し、プログラム、展示、シンポジウム、刊行物の出版を行う。

1995年5月に現代アメリカ・プリント・カルチャー研究センターは、第1回目の会議をウィスコンシン州マディソンで開催した。会議のテーマは「多様なアメリカとプリント・カルチャー」である。そして1998年にこの会議の発表論文をもとに単行書が刊行されたのである[39]。

1.3.3　ウィーガンドによる図書館情報学教育批判とプリント・カルチャー研究

こうした経過を経てウィーガンドがプリント・カルチャーとの関わりで図書館史研究を主張した論考としては、1997年から1998年にかけて発表された文献が最も初期のものとなる[40]。ここでは1997年に図書館情報学教育協会の機関誌と『ライブラリー・ジャーナル』に発表された論文を取り上げておく。なお、これらはいずれも図書館情報学教育に関する提言の形をとっている。

ウィーガンドは、(1)この15年間に進展してきた読書に関する研究領域と業績に言及し、(2)そうした研究が図書館情報学教育に重要であると主張している。(1)に関しては、読書に関する研究分野としてロマンス小説の研究で有名なジャニス・A.ラドウェイ（Janice A. Radway）の区分を援用し、「リテラシー研究」、「プリント・カルチャー」、「読者反応理論」、「読書のエスノグラフィ研究」に分けて説明する。

「リテラシー研究」については、ハーヴェイ・グラフ（Harvey Graff）とエリザベス・アイゼンスタイン（Elizabeth Eisenstein）の業績を取り上げている[41]。例えばグラフは19世紀のアメリカ都市部でのリテラシーの進展を、社会階級、グループの力関係、リテラシーを他のグループのコントロールに使用する動きなどとの関連で解明したのである。

「プリント・カルチャー」はリュシアン・フェーブル（Lucien Febvre）やロジェ・シャルチェ（Roger Chartier）、ロバート・ダーントン、それにアメリカ好古協会の「アメリカ文化におけるブック・ヒストリー」プログラムの成果といえるキャシー・デイヴィッドソン（Cathy Davidson）やロナルド・A.ツボレイの業績に触れた[42]。ここでは作品自体に焦点を置くのではなく、読書の行為自体を社会的行動と把握する。作品は作品の物理的形態といった諸要因や読み手の目的や経験によって異なってくる。この問題意識がアメリカ好古協会の「アメリカ文化におけるブック・ヒストリー」プログラムに組み込まれている。プリント・カルチャー史の研究者は、読書は常に複雑な過程で、異なるグループや個人は己の目的のために相違する読み方をしてきたと把握する。それは「意味」を創りだすことを意味し、そこには人種、ジェンダー、階級が関係している。

この考えは3つ目の「読者反応理論」に結びつく。ここでウィーガンドはルイーズ・ローゼンブラット（Louise Rosenblatt）、スタンレー・フィッシュ（Stanley Fish）、ヴォルフガン

グ・イーザー（Wolfgang Iser）を指摘した[43]。基本的にこの理論は作品についての普遍的に有効な解釈は支持しがたいとの考えを有する。読者は作品の意味を探すのだが、それは読者自身の置かれている状況、時代の規範などによって大きな影響を受け、それはまた社会経済的なグループによっても影響を常に受ける。

最後が「読書のエスノグラフィ」で、ウィーガンドはジョナサン・ボヤリン（Jonathan Boyarin）の編書、および同書に執筆したエリザベス・ロング（Elizabeth Long）の論文を取り上げた[44]。ウィーガンドはボヤリンの編著『読書のエスノグラフィ』の執筆者に共通する点として、特定の時代における特定のグループが実際の読書を行うについての文脈を定めようとする試みにあるとまとめている。特にロングの論文については、近代の孤独な読者という考えが読書の社会的基盤を完全に看過する結果になっているとのロングの指摘を重視した。ロングは20世紀初頭と1980年代の読書グループを検討し、そこに読書についての「社会的基盤」を見出した。すなわち、解釈についての枠組みの共有、特定の場所、社会関係、経済関係への参加などである。最終的にロングは、グループのメンバーは各自が他者の解釈、文化、社会と調整することを発見したのである。ウィーガンドはこのロングの論考は図書館情報学の教員に最も有用であるとしている。

要するにリテラシーの研究は、リテラシーが実践される文脈を理解することが非常に重要なことを示している。プリント・カルチャー史の研究は、読書が高度に複雑な過程であることを証明している。読者反応理論は、読書の過程において、読者は作品の意味を積極的に作り上げていくことを示している。そして読書のエスノグラフィ研究は、共有される解釈の枠組み、共有される場所での行いといった「社会的基盤」を土台に、共同的な活動として読書を把握している。

さらにウィーガンドは、バーバラ・H.スミス（Barbara H. Smith）、ジェーン・トンプキンズ（Jane Tompkins）、それにジャニス・ラドウェイを指摘した[45]。これらはカルチュラル・スタディーズの研究者で、いずれもポピュラー・カルチャーを研究している。スミスは文化の質の判断に際して、文化的エリートが数世紀にわたって確立してきた基準に頼ることに反対している。また例えばトンプキンズについては、ウェスタン小説を低くみるという通説に反論し、ウェスタン小説は意味への飢えを満足させるとした。ウィーガンドによると、これらは図書館サービスの実践に直接かかわる事柄である。

以上のような4つの領域およびポピュラー・カルチャーの研究が、いずれも人種、ジェンダー、階級、さらには性的志向、年齢などに関係するのはいうまでもない。

ウィーガンドの図書館情報学教育についての2つの論考の結論は明快である。図書館情報学教育は上述のような進展しつつある研究領域をまったく取り込んでいない。それは大きな欠点であり、将来の図書館サービスの構築にも大きな痛手となる。上記の主張に、研究上の視点や方法についての多様性を認識することの重要性、図書館学や図書館史研究で当然の前提とされていることの捉え返し、および図書館史研究自体の研究上および位置づけ上での閉塞感の克服を加えれば、プリント・カルチャー史の研究が図書館史研究にとって実り多く、1つの方向を示すことが理解できる。そしてウィーガンドはこの方向を目指し、その牽引役を率先して買っ

て出たといえよう[46]。

なおウィーガンドは「場としての図書館の研究」に関連して、「図書館の生活の中での利用者」（the user in the life of the library）から、「利用者の生活の中での図書館」（the library in the life of the user）への研究の重点の移動を主張していることも指摘しておく[47]。

2　ウィーガンドと図書館史の業績

ウィーガンドの図書館史の業績は膨大な数に上っている。本章では3冊の研究書に的を絞り、その内容と意義を記す。

2.1　『司書職の出現と政治』（1986）[48]

2.1.1　『司書職の出現と政治』の概要

ウィーガンドの最初の本格的な図書館史研究書が1986年に刊行された『司書職の出現と政治』である[49]。同書はアメリカ図書館協会が結成された1876年から1917年までを扱った業績で、アメリカ図書館協会の歴史を記している。そして第1章「あっぱれな発端」、第2章「『最善の読書』に結集する」（1876-1886）、第3章「『最低のコスト』を追求する」（1886-1893）、第4章「『最大多数の人』を識別する闘い」（1893-1901）、第5章「専門職のアイデンティティを作り出す」（1901-1909）、第6章「専門職の成果を固める」（1909-1917）で構成されている。

メルヴィル・デューイが有名な標語「最善の読書を最低のコストで最大多数の人に」を考案したのは1879年である。『司書職の出現と政治』はこの標語を中心に据えて、アメリカ図書館協会の初期41年間の歴史を記述している。冒頭、ウィーガンドは次のように述べる。

> この40年間を通じて、「最善の読書」資料を収集するために図書館員を支援する取り組みが、アメリカ図書館協会の主たる目標になった。またこうした取り組みが、揺籃期の弱々しい時期、そしてときに動乱の時期にあって、図書館協会を結束させる紐帯として役立ったのである。1876年から1917年のあいだにアメリカ図書館協会理事会を担った人は高度に同質なグループで、理事の社会的な地位は支配的文化の「性格」を反映していた。「洗練された」階級の構成員として、図書館指導者は直感的に「最善の読書」の内容を知っていた[50]。

ウィーガンドによると、図書館指導者は「直感的」に「最善の読書」を知っており、また住民は良書を読むことで「おのずと」前向きの社会的行動をするようになり、社会も向上すると考えていた。逆も真である。これらは図書館界の暗黙の前提であり、了解事項であった。こうした認識のもと、ウィーガンドはアメリカ図書館協会の初期40年間を考察するに際して、「最低のコストで」と「最大多数の人に」に焦点をあてることになる。これらは手段をめぐる論議である。目的をめぐる論議であれば、図書館と社会との関係とか、図書館の存在意義といった議論が浮上する。しかし図書館協会の歴史の大部分は手段をめぐるものなので、中心課題は図書館界やアメリカ図書館協会の内部での論争や闘争の解明が中心になる。

第1章はアメリカ図書館協会が生まれた1876年の図書館員大会を記し、第2章はジャスティン・

ウィンザー（Justin Winsor）やウィリアム・F.プール（William F. Poole）といった学者型の主流となる図書館指導者、それに『ライブラリー・ジャーナル』の発行者R.R.バウカー（R.R. Bowker）などと、デューイの確執を詳細に解明している。第3章は章題の副題「デューイの復活：1886-1893」が示すように、この時代に図書館協会の指導層はデューイが指導する新しい世代に移って行った。こうした新世代は図書館業務の効率性（「最低のコストで」）に最も関心を抱いていた。またデューイの地位は、アメリカ図書館協会理事会内での仲間グループ、ニューヨーク州立図書館やニューヨーク州図書館学校の部下、それに全国にちらばるデューイの図書館学校の卒業生で盤石になった。第4章「『最大多数の人』を識別する闘い」（1893-1901）の時期は、党派主義、地方中心主義、特別な関心を持つグループや館種別のグループなど多様な関心が増大し、統一された全国の声というアメリカ図書館協会のイメージを脅かした。この章はアメリカ図書館協会がこうした圧力に適応していく過程を描いている。第5章「専門職のアイデンティティを作り出す」（1901-1909）の時代に、アメリカ図書館協会は有給の幹部と事務局員をまかなえるほど大きくなっていた。またアンドリュー・カーネギー（Andrew Carnegie）の図書館建設によって司書の需要も増大していた。図書館協会は自立を遂げ、1910年代に展望を持つことができた。そして図書館協会は司書職がアイデンティティを作り出すのを助けた。そうしたアイデンティティは図書館指導者が育った社会経済的グループの価値を反映しており、「最善の読書」や図書館の目標について議論することはなかった。もっぱら「最小のコスト」でサービスを提供する方法、「最大多数の人」の中身について、すなわち手段について論議し、手段についての論議が司書職のアイデンティティを形成したのである。最終の第6章「専門職の成果を固める」は1909年からアメリカがドイツに宣戦する1917年までを扱っている。この時代は総じて穏やかな時期で、アメリカ図書館協会はそれまでに積み上げてきた成果を固めた時期である。ウィーガンドは、「こうした時期を欠いていては、アメリカの戦争への取り組みに立派な寄与ができる準備ができていなかったろう」[51]とまとめている。

2.1.2　『司書職の出現と政治』の意義

以上が『司書職の出現と政治』の大筋であるが、同書の意義を理解するにはそれまでのアメリカ図書館協会に関する研究を振り返る必要がある。アメリカ図書館協会の歴史を単行書の形でまとめた図書は多くない。まず1926年にジョージ・B.アトリー（George B. Utley）がまとめた『アメリカ図書館協会50年史』[52]は、1926年すなわち協会の50年記念史であり、編年体の事実史である。1967年にエドワード・G.ホーリー（Edward G. Holley）がまとめた『歴史を掘り起こす』[53]はアメリカ図書館協会が生まれた1876年に的をしぼり、貴重な1次史料を抜き出して解説を加えているが、資料集という色彩が濃い。続いて1976年にはペギー・サリヴァン（Peggy Sullivan）が『カール・H.マイラムとアメリカ図書館協会』[54]を発表した。同書はマイラムが事務局長を務めた1920年から1948年までを扱ったもので、その時代のアメリカ図書館協会の活動を知るのに便利ではあるが、事柄を並べるという域をでていない。1978年に刊行されたデニス・V.トミソン（Dennis V. Thomison）の『アメリカ図書館協会史』[55]も同様である。同書は1876年から1972年までを編年体形式で事柄を紹介している。アメリカ図書館協会の歴史を綴るという以上のものではなく、記述自体の正確さにも問題がある。

ウィーガンド自身は『司書職の出現と政治』の副次的な目的として2つを指摘している[56]。その1つは、1次史料に依拠する図書館史研究の利点を理解することであり、この目的はそののちの図書館史研究に定着し、達成されたと思われる。ウィーガンドが指摘したいま1つの目的に、社会史、都市史、女性史、家族史、書物史の研究者が、図書館史に目を向けるということがあった。しかし本書によってこの目的が達成されるのは困難であったろう。というのは上述のようにウィーガンドは図書館界やアメリカ図書館協会の内側での手段をめぐる論議や確執を詳細に記しており、そうした点では決して視野が広いとは思われないからである。たしかに学者図書館員と専門職図書館員、東部と中西部、男性と女性、学術的教養と図書館技術といった対抗軸が、多くの人物を登場させることで具体的に記述されているのだが、それらはあくまで図書館界やアメリカ図書館協会の内側に留まっており、アメリカ史の流れに位置づけるという水準までは達していないように思われる。あえていえば、必要以上に人物や事柄を登場させることで、本筋がわかりにくくなっているとさえ思える。

それはともかく、上述のようなアメリカ図書館協会の研究史を振り返ると、標語「最善の読書を最低のコストで最大多数の人に」を軸に、これまで未開拓の1次史料の渉猟と40年間のアメリカ図書館協会理事のプロフィールの分析と変化を基盤に、標語の内実を批判的かつ実証的に明らかにしたウィーガンドの研究は、従来の図書館史研究を凌駕するものであった。

2.2　『プロパガンダのための積極的な手段』(1989)[57]

2.2.1　『プロパガンダのための積極的な手段』の概要

続いてウィーガンドは1989年に『プロパガンダのための積極的な手段：第1次世界大戦下のアメリカ公立図書館』を出版した。同書は第1章「中立の時期の公立図書館」、第2・3章「国へのサービス」、第4章「台所の兵士の動員」、第5章「不忠誠な文献の除去」、第6章「移民の教育」で構成されている。第1章はアメリカが中立を保つ時期、すなわちドイツに宣戦布告する1917年4月6日までを扱っている。この時期、英国のプロパガンダはドイツよりもはるかに組織化されており巧みであった。アメリカの図書館界は概して中立を保ち、ドイツ語の図書の入手が困難になるのを懸念した。第2章は宣戦布告以後の現場の公立図書館の対応を扱っている。各館はほぼ共通して、戦時に適した資料の提供、社会サービス機関や政府機関への施設の提供、とりわけ子どもへのサービスを重視したという。戦争は公立図書館の使命感を高め、価値ある地元の機関としての正当性を高めたのである。第3章が扱う時期は第2章と同じだが、現場の図書館の国への対応を扱い、戦時の責任を実行するについて全国的な方向に積極的にしたがったと結論している。図書館員は連邦政府の戦時債などを私費や図書館費から購入した。またアメリカ図書館協会の戦時図書館サービスに協力した。そして戦争協力に消極的だったり拒否したりした図書館員には、図書館界として支援するどころか、むしろオストラシズムを行ったのである。第4章は食料節約保全運動を扱っている。この連邦政府が重視するプログラムに各図書館は積極的に対応した。食料についての適切な資料を用意し配布するのはまさに図書館員の得意とすることであった。また戦時に女性が主導権を握る分野は少なかったが、このプログラムは女性が中心であったし、公立図書館員は圧倒的に女性が多く、当然ながら家事にも長けていた。

このプログラムの展開は国や市民にたいして、図書館は戦時協力で重要な部分を担っていると知らせる絶好の機会だったのである。続く第5章はいわゆる検閲問題を扱っている。一部の例外的な図書館員はいるものの、全体的にみると公立図書館は検閲者としての役割を担った。「問題ある資料」を貸出から撤退させ、閲覧には申込みをさせるといった措置が一般的であったという。最終の第6章は移民のアメリカナイゼーションについての図書館界の取り組みを要約している。結論として、アメリカ公立図書館はアメリカの参戦以降、「プロパガンダのための積極的な手段」という役割を担ったのである。

2.2.2　『プロパガンダのための積極的な手段』の意義

以上が『プロパガンダのための積極的な手段』の大筋であるが、同書の意義を理解するために、それまでの第1次世界大戦とアメリカの図書館に関する研究を振り返っておく。単行書としては、アーサー・P.ヤング（Arthur P. Young）が1981年に刊行した『第1次世界大戦における兵士への図書』[58]が唯一の研究書であろう。同書の副題「アメリカ図書館協会と第1次世界大戦」が示すように、ヤングの著作はアメリカ図書館協会の戦時図書館サービスを明らかにしたすぐれた図書である。ヤングの図書と比較すると、『プロパガンダのための積極的な手段』の特徴は、公立図書館の現場から第1次世界大戦への具体的な関わりを探った点にある。それも大きな公立図書館とともに、小規模な公立図書館を重視している。このことによって、いわば上から出された指令、方針、政策が実際にどのように現場で受け止められ、実施された（あるいは実施されなかった）かが解明されると同時に、各館固有のサービスや重点の置き方が理解できるようになる。同時にそうした分析を通して、アメリカ公立図書館界としての全体的な動きも抽出している。それらを各館の年報や1次史料によって描き上げたところに本書の特徴があるといえよう。

参戦以前のアメリカの図書館界は中立を保ち、参戦後は積極的に協力して図書の検閲さえ行った。これは何らウィーガンドが研究結果として最初に提起した解釈ではない。いわば通説にさえなっている。本書の重要性は、それを現場の公立図書館や図書館員の思想や実践のなかから描き出したことにある。それはまた、連邦やアメリカ図書館協会といった上からの施策にたいして、現場の図書館が示す距離を探る試みでもあったといえよう。

ただ残念なことに例えば最終章「移民の教育」の突っ込みが足りなかったように思える。19世紀末からアメリカ公立図書館は移民へのサービスを行ってきた。そこでのサービスはアメリカナイゼーションといえるが、強制的ではなく移民の要求やニーズを重視した寛容度の高いものであったと思われる。アメリカ図書館界が歴史的に実践してきた移民へのアメリカナイゼーションとのからみで、第1次世界大戦期の移民へのアメリカナイゼーションに関する諸説や実践をいっそう豊かに描くことは可能であったろう。

2.3　『手に負えない改革者』（1996）[59]

2.3.1　『手に負えない改革者』の概要

さらにウィーガンドは1996年に『手に負えない改革者：メルヴィル・デューイの生涯』を発表した。本書の内容を簡略に紹介すると次のようになる[60]。

本書の大部分を占めるデューイの公的、私的生活についての具体的な記述は、デューイ神話を形成する逸話として興味深い。例えばニューヨーク州立大学理事会事務局長時代に1日に550通以上の手紙を受け取っていたデューイは、執務室に自ら考案した120の区分け棚を設け、職員はデューイと言葉を交わすことなく所定の位置に置かれたメモを介して仕事を進めた[61]。また業務効率をあげるために、さまざまな用具を考案している[62]。理想世界の達成に向けて複数の事業を同時に進めるために健康の維持を重視するデューイにとって、健康さえも目標管理の対象になった。デューイ夫妻は規則正しい生活をするための規則を作成し、それにしたがって健康の維持につとめた[63]。デューイにとって、秩序と効率がすべての行動の基本指針であった。

偉大なる遺産

後世に残るという観点からみれば、多岐にわたる活動のなかでも図書館関係の業績が際だっている。デューイの最大の遺産は、白人中産階級と家父長制度の文化的枠組みのなかで成立していた19世紀後半の図書館に、効率的な運営管理の手法とサービスの方法を適用することで、司書職に新しい専門領域を作り上げた点にある。またその専門領域を支えるために図書館教育を促進し、とりわけ女性図書館員を中心とする司書職の構造を確立した。さらにすべての図書館業務において徹底的な効率化をはかり図書館業務を規格化した。デューイ十進分類法、目録カード、図書館の備品や用品など、図書館業務のあらゆる部分にデューイの遺産が残されている。またデューイはアメリカ図書館協会の仕事とともに、メートル法普及運動、簡易綴り字普及運動に携わった。これらは成功したとはいえないが、デューイが生涯をかけて追求した改革運動であった。アメリカ図書館協会事務局長とアメリカ・メートル法用品店、綴り字改良協会の3つの肩書きが1枚に書かれた名刺は、若きデューイの目指していた理想世界を示すものである[64]。保養施設レイクプラシッド（Lake Placid）・クラブの運営はデューイの人生で最も長期にわたる事業になった。1920年代に最盛期を迎えたクラブには、各種店舗、ゴルフコース、テニスコート、図書室が完備され、大規模な敷地では各種のプログラムが実施された。これはストレスにみちた白人中産階級の専門職のための保養文化施設であった。

負の遺産

司書職に関して、デューイは「最善の読書」の選択の権限を司書職以外の専門職に委譲することに疑問を抱かなかった。司書は資料選択の役割を放棄し、司書職の読書への関わり方は限定的になった。デューイ十進分類法、公共図書館の蔵書構成、図書館教育など、いずれのプロジェクトにも中産階級の思想が組み込まれたが、それは現実社会の多様性とは隔たりがあった。

デューイの残した最大の負の遺産は人種差別主義である。ウィーガンドは、レイクプラシッド・クラブにおけるユダヤ人入会の拒否により浮上した人種差別主義が、すでにニューヨーク州立大学理事会時代にも現れていたことを指摘する。デューイは専門職の確立に重点をおき教育機関の評価基準の設定に力を注いだのであるが、その際、ユダヤ人にとって専門職参入への唯一の手がかりであった私立の専門職養成学校に批判的な態度を取っていたからである。デューイがレイクプラシッド・クラブで構築しようとしたコミュニティは、WASPのみを構成員として認める思想、人種や階級に不寛容な思想をはらんでいた。また女性との交際にも問題があった。1905年のアメリカ図書館協会年次大会後の旅行では、明らかに社会的規範を逸脱した女性

への振る舞いを行っていた。デューイは司書職に女性を積極的に登用し、専門職として認めていたし、ユダヤ人と個人的に友好関係を結び、その高い能力を評価していたのかもしれない。しかし仮にそれが真実だとしても、デューイの実際に取った行動は差別行為としか表現できないものであった。人種差別主義と女性への振る舞いはデューイの評価を徹底的に損ねた。

手に負えない改革者

デューイの生涯は一貫して「改革と効率性」の追求に捧げられた。ウィーガンドは、デューイの志向が中産階級の家父長制を基盤とした同時代のWASPの世界観から生じたものであると指摘している。福音主義に強く影響を受けたデューイの生い立ちは、信仰心に基づく改革運動への揺るぎない精神を育み、その思想の中核には人類の進歩のために己のすべてを捧げる利他主義という名の道徳観がおかれた。WASPの世界観や福音主義の改革運動に問題があったわけではなく、それらとデューイの強烈な個性が結びついたとき、「手に負えない」状況が生まれた。というのもデューイの性格には重大な欠陥があったからである。独善性と強引さは大きな事業をやり遂げるための必要悪の範囲を完全に超えていた。他人から指摘された非を認めることは決してなく、愛他主義、自己犠牲、大義、道徳主義というレトリックで常にこれを正当化した。その結果、デューイは常に多くの敵に囲まれる人生を送った。しかし2人の妻をはじめとする理想世界への賛同者によって、デューイは完全に孤立無援になることはなく、その生涯を終えることができたのである。

2.3.2　『手に負えない改革者』の意義

『手に負えない改革者』の特徴をいっそう明らかにするために、それまでのデューイに関する伝記に触れておく。デューイについての伝記としては、1932年にだされたグロスヴェナー・ダウ（Grosvenor Dawe）の『メルヴィル・デューイ：予言者、霊感者、精力家』[65]がある。この伝記は1931年12月にメルヴィル・デューイが死去し、それを追悼するための伝記である。基本的に賛美型の伝記であるが、デューイの晩年に秘書をしていたロバート・フッド（Robert Hood）が、デューイの日記に現れる多くの速記を簡易綴り字に転記しており、研究の助けになる。続いてフレモント・ライダー（Fremont Rider)が『メルヴィル・デューイ』[66]を1944年に刊行した。アメリカ図書館協会が刊行する「アメリカ図書館の開拓者」シリーズの第6巻として発行され、このシリーズの意図はアメリカの図書館を形作った指導者の図書館での業績を描き、加えてその人物の一生を素描することにあった。著者のライダー自身が晩年の2年間はデューイと日常的に接し、デューイ夫人の姪と結婚していた。そしてデューイを知ることがなければ図書館界に入ることもなかったと述べている[67]。この伝記はあくまで図書館界での業績、すなわち十進分類法、図書館学校、司書職にたいする福音者、図書館関係団体、図書館関係雑誌、女性の図書館界への受容を中心に、それらの積極面に焦点をあてて記している。そのためニューヨーク州立大学理事会、レイクプラシッド・クラブ、綴り字改良や度量衡の改良は脇に置かれている。このライダーによる伝記は1972年に再版されている[68]。さらに1978年にはサラ・K.ヴァン（Sarah K. Vann）が伝記『メルヴィル・デューイ』[69]を刊行した。この図書は第Ⅰ部「メルヴィル・デューイ」、第Ⅱ部「デューイの代表的著述」、第Ⅲ部「書誌」で構成され、第Ⅱ部に160頁、第Ⅲ部に40頁をあてている。第Ⅱ部と第Ⅲ部は基礎的な資料と

情報を的確に紹介しており便利である。第Ⅰ部がいわば伝記の部分であるが、この部分の本文は30頁にすぎず、形成期、アマースト時代、1876年図書館員大会、ボストンの時代、コロンビア・カレッジの時代、オールバニの時代、レイクプラシッド・クラブの時代と小項目を立てて、図書館界での業績を中心にまとめている。サラ・ヴァンによる伝記は図書館界での業績に重点をおいたコンパクトな伝記といえるが、概してデューイの積極面を扱っているし、新しい人物像を描いているわけではない。

こうした研究史を踏まえて、ウィーガンドの伝記の特徴を示すと以下のようになる。まずあくまでも本書はデューイの伝記であるというウィーガンドの執筆目的に関係する。デューイの業績自体の記述は重要ではあるが、それを通してデューイという人物を理解したいというのが、伝記の伝記たるゆえんであり、それは成功していると思える。それは業績の裏に潜む、人間的な生々しさを浮き彫りにすることでもある。

第2に、本書は徹底的に1次史料を収集し、それに依拠する精緻な研究である。いままで取り上げられていない原資料を縦横に駆使して、デューイの業績と人とを描き上げた。これはデューイのみならず、従来の図書館史の業績を再検討する必要性をも示唆している。

第3に、本書でも批判的図書館史研究者としてのウィーガンドの問題意識と視点が貫かれている。図書館にまつわる業績は、これまで多分に非政治的なものとして扱われてきた。むしろ、政治性の排除が図書館のあるべき姿だとされてきたといえよう。ウィーガンドはごく普通の図書館業務がいかに19世紀後半の支配的な価値や思想を内面化しているかを示してみせた。この問題意識や視点はいまや図書館史研究の共通認識になっており、単なる素朴実証的な論文は研究の上では評価されなくなってきている。

第4に、本書はたしかにデューイという1人の人物の伝記ではあるが、これまでのデューイ研究の全体を見直しつつ、デューイの全体像を当時の社会的動向との関連で解釈していこうとするものである。とりわけデューイの時代の図書館界の基本的スタンスが本書からうかがえる。そうした点で単なる伝記を超越している。

以上のようにウィーガンドの代表的な3点の著作を取り上げてきた。そこで一貫しているのは、1次史料の渉猟にもとづく批判的図書館研究であり、それはとりわけ先行研究と比較することで明確になった。

3　ウィーガンドと図書館史研究

ここではウィーガンドの図書館史研究にまつわる業績を簡単に総括しておきたい。そこでは「図書館史研究」、「図書館史研究の基盤の構築」、「図書館、図書館史を理解する基本的な枠組みの設定」、「プリント・カルチャーへの展開」、「包括的解釈への試論」と5つにまとめて説明する。

3.1　図書館史研究

これまでの章で述べたように、図書館史研究それ自体についてのウィーガンドの立場は明確である。一言で述べると、1次史料の網羅的な収集にもとづく、問題意識に富んだ批判的歴史

研究であり、従来の通説となっている事柄などの捉え返しであり、さらには理論の適用である[70]。

3.2　図書館史研究の基盤の構築

この分野には図書館史の文献展望や基本的な参考図書の編纂などが含まれる。図書館史の文献展望については、1977年から1988年に発表された図書館史関係文献について、2年分をまとめて『ジャーナル・オブ・ライブラリー・ヒストリー』（『ライブラリーズ・アンド・カルチャー』）に発表してきた。この文献展望によって、図書館史研究の現状と課題が明快にわかるようになった[71]。そうした年次文献展望と相違して、いっそう広い期間を取り上げたのが、2000年に発表した「アメリカ図書館史研究、1947-1997年」[72]である。かなり広い期間を取り上げて、解釈を交えた文献展望としては、ジェシー・H.シェラとシドニー・ディツィオンの業績がある[73]。シェラの1945年論文「アメリカ図書館史についての文献」は、1851年に刊行されたジョサイア・クウィンジーの『ボストン・アセニアムの歴史』を起点に、ディツィオンやスペンサーの業績を終点にして、アメリカ図書館史の主要文献をほぼ取り上げ、整理、分類するとともに、特徴と問題点を記述した力作である。1973年の文献展望は1945年論文に加筆したもので、シェラ自身およびディツィオンの業績を重視している。またディツィオンの文献展望はシェラを記念する1973年の単行書『図書館の理論に向けて』に収められた文献展望である。1973年といえばハリスが修正解釈を提供した年であり、シェラおよびディツィオンの文献展望は、第3世代の研究者を含んでいない。ウィーガンドの2000年論文「アメリカ図書館史研究、1947-1997」によって、はじめて1850年から2000年までの図書館史関係文献と研究の変遷を総覧できるようになった。そうした意味で、このウィーガンドの論文は大きな意義がある。その具体的な内容はともかく、第3世代を組み込むとともに、女性、黒人、プリント・カルチャー研究を項目として取り上げ、さらにウィーガンドが図書館を考察する場合の基本的要素である「インスティチューション」、「専門技量」という分け方を導入するなど、50年間の図書館史研究の進展とともに、ウィーガンドの関心の所在が明示されている。

また1983年には『アメリカ大学図書館界の指導者、1925-1975年』、1990年には『アメリカ図書館伝記事典：補遺版』、1994年には『図書館史事典』など、図書館史についての基本的参考図書の編者になっていることも、図書館史研究の基礎を据えるためである[74]。

3.3　図書館、図書館史を理解する基本的な枠組みの設定

第１章第2節で示したように、「権威」、「インスティチューション」、「専門技量」、「性格」という要素で図書館を理解し分析するというウィーガンドの姿勢は、この枠組みを発表した1986年論文から最近の論文まで一貫している[75]。そしてこの枠組みは単に図書館史研究だけでなく、それ以上に専門職論や図書館情報学教育に関係し、幅の広い領域にまたがるものである[76]。ここでは各要素が図書館研究や図書館情報学教育にどのような意味を持っているか、すなわちウィーガンドがどのような問題提起や分析をしているのか箇条書きにしておく。

(1)まず「権威」については司書職の専門職論議と関係する。それは第1章第2節で示したと

おりである。ウィーガンドは、古典的な特性理論、それに機能主義理論、構造主義理論、職独占理論では、司書職の専門性をうまく説明できないと考える。またギャリソンは19世紀末から生じる司書職の女性化が司書職の専門職化を阻んだと結論していたが、ウィーガンドはギャリソンの考えにも賛成していない。そしてウィーガンドは、アボットやスターの専門職論を取り込み、管轄領域と権威を重視する。その場合、医者や法律家はグループとして権威を持つが、司書職はそうした意味での権威を持っているわけではない。そこでウィーガンドは、スターがいう「文化的権威」に注目し、権威は聖書、参考図書、研究書といった物体によっても行使されうるとの考えを取り込んだ。

(2)権威は物体（図書）によっても行使され、その権威が認知されたがゆえに、図書館、とりわけ公費で賄われる図書館が出現し発展してきた。しかしながらその物体の価値を決めるのは、図書館員ではなく外部の専門家である。

(3)(2)を決定づけたのがメルヴィル・デューイで、デューイは同時に図書館の管轄領域も設定した。それは「インスティチューション」と「専門技量」を司書職の管轄領域にするということである。前者は図書館の運営やサービスであり、後者は図書の内容への価値判断ではなく、図書へのアクセスを効率化させるための分類や目録といった専門技量である。

(4)デューイが考案したアメリカ図書館協会の標語「最善の読書を最低のコストで最大多数の人に」において、図書館員は「最善の読書」の判断を外部に委ねた。すなわち『ALAカタログ』、『ブックリスト』などの図書選択ツールは、いずれも外部の専門家が選択し、図書館界は「最善の読書」の内容をめぐる議論をほとんど行わなかった。一方、「最低のコスト」と「最大多数の人に」という側面を追求してきたのである。これは「インスティチューション」と「専門技量」への専心に他ならない。

(5)なお外部の専門家が図書の価値を決めず、図書館員が価値を決めてきた領域がある。それは児童書および学校図書館に関わる図書である。例えば『ブックリスト』やウィルソン社の『フィクション・カタログ』とは異なり、『チルドレンズ・カタログ』は概して図書館員の評価で作成されてきた。その点で特に学校図書館の歴史は研究が進んでいないが、魅力的な研究領域である。

(6)こうした「インスティチューション」と「専門技量」への専心は、デューイの図書館学校で結晶化され、それは図書館学大学院が図書館情報学大学院、そして情報学大学院と名称を変更しても、基本的に現在まで続いている。またこの2つの領域への集中が図書館、図書館学の偏狭な姿勢をもたらしている。

(7)最後に「図書館員の性格」である。図書館指導者や図書館員は圧倒的に白人中産階級が占めている。家庭の背景により幼少時から培われた価値観は、就学期、大学での教育、図書館学校での教育、さらに図書館界で培養され、それが当然の前提として図書館管理、業務、サービスのあらゆる面に無条件で浸透していった。それがまた図書館という機関の性格を決定したのだが、そうしたことへの批判的自意識が高まった時期は多くはなかった。

以上のように少し単純化して、また強引にウィーガンドが図書館をみる枠組みや要素と、ウィーガンドの研究成果や問題提起とを結びつけてみた。子細に検討すれば、ウィーガンドの主張に

はいくつか問題点があるかもしれないが、いずれもウィーガンド自身の研究結果から導かれている興味ある主張であるし、ここには現在の図書館学、図書館学教育、図書館史研究への理解を深める内容と、多くの積極的な提言が組み込まれている。

3.4　プリント・カルチャーへの展開

第１章第3節で示したように、ウィーガンドがプリント・カルチャーとの関わりで図書館史研究を主張した論考としては、1997年から1998年にかけて発表された文献が最も初期のものであった。ウィーガンドはこの方面の研究では実質的な論考を発表するというよりも、むしろこの方面での舞台設定者という役割が目立つ。最も重要なのは、1992年にウィスコンシン大学のウィーガンドとカール・カエスル、およびウィスコンシン州歴史協会のジェイムズ・P.ダンキーが中心になり、ウィスコンシン大学とウィスコンシン州歴史協会が協力して現代アメリカ・プリント・カルチャー史研究センターを発足させたことである。既述のように、1978年に議会図書館に図書研究センターが設置され、特にアメリカ好古協会が1983年に開始した「アメリカ文化におけるブック・ヒストリー」プログラムが、研究に刺激を与えていた。そして1991年に「著述、読書、出版の歴史研究協会」（SHARP）が国際的な広がりを持って成立した。そうしたなかでウィーガンドなどは単にいま1つのセンターをウィスコンシン大学から正式に認められて創設したのではなかった。この設置には、先発のアメリカ好古協会のプログラムを評価しつつ限界を指摘し、同時にウィーガンドやカエスル、それにダンキーの意図することを積極的に大学に訴えていく必要があった。それは同時に現代アメリカ・プリント・カルチャー史研究センターの性格を決定づけることでもある。

アメリカ好古協会はマサチューセッツ州ウースター（Worcester）に位置する。そこでの研究はアメリカ好古協会が所蔵する資料にも規定され、図書をもっぱら対象とし、北東部の白人を対象に、それも1876年以前を研究課題にする場合が多かった。それにたいして、ウィーガンドたちは1876年以降（現代）を対象に多様なメディアを扱い、特にウィスコンシン大学や州歴史協会が保有する強力な新聞やオルタナティヴな資料群を活用して、階級、ジェンダー、人種、エスニシティを重視するという構想を主張したのである。大学からの財政支援はないものの、このようにして現代アメリカ・プリント・カルチャー史研究センターは発足した[77]。

事業としては1995年から隔年の大会を単独あるいは他団体と共催で開催している。1995年の第1回大会のテーマは「多様なアメリカとプリント・カルチャー」でその論集は1998年に刊行された[78]。さらにウィーガンドらはウィスコンシン大学出版局から「現代アメリカにおけるプリント・カルチャー史」シリーズを刊行した[79]。その最初の刊行物はポール・ボイヤー（Paul S. Boyer）の名著『活字の純潔さ』であった。これは1968年の初版にたいして、その内容を検討し、さらに2つの章を加えて現在までをおおったものである。また絶版となっていたディー・ギャリソンの『文化の使徒』を再版し、そこではクリスティン・ポーリーがすぐれた「まえがき」を執筆し、同書の意義と限界を記している。またウィーガンドは『ライブラリー・クウォータリー』、『アメリカン・クウォータリー』、『ライブラリー・トレンズ』に編集者あるいは特集号編集者として参加し、プリント・カルチャー史研究を深め広めている。

3.5　包括的解釈への試論

現時点でウィーガンドによるアメリカ図書館史の最も包括的な業績は1999年の『ライブラリー・クウォータリー』に発表された「20世紀の図書館・図書館学を振り返る」である[80]。この論文はウィーガンド自身の豊かな個別研究、各論研究を総合化するとともに、図書館史研究のあり方に問題提起を行っている。

ウィーガンドの問題意識や提言の骨子は以下のようになる。アメリカの公立図書館は豊かな歴史を持ち多くの利用者を有する機関、それも全国に遍在する機関であるが、そうした機関のうちでは最も研究が遅れている。また図書館情報学研究は図書館の研究にあたって表面的現象だけを追い、図書館サービスの深い意味を解明することは少なく、それに図書館情報学の中だけで完結している。こうした状況が生じている大きな理由の１つに、他の社会科学などで積極的に用いられている批判理論などの適用にまったく無頓着という事実がある。そのためアメリカ図書館の歴史的あるいは現代的な役割を分析できないでおり、そのことが図書館の将来を構想する場合にも、大きな痛手になっている。

こうした問題提起や提言に続いて、ウィーガンドはあらゆる館種を取り上げて20世紀の図書館史を骨太に描いている。1893-1918年（革新主義時代の図書館と図書館学）、1918-1945年（両大戦の間）、1945-1956年（第2次大戦後の拡大）、1956-1965年（連邦補助金の影響）、1965-1990年（多様化する司書職の姿）と時代を設定しているが、ここでは最初の2つの時代を紹介しておきたい。

論文全体としては、世界博に合わせて開かれた1893年アメリカ図書館協会シカゴ年次大会を起点に、アメリカ図書館協会の標語「最善の読書を最低のコストで最大多数の人に」を軸に分析している。1893年から1918年は、シカゴ年次大会から第1次世界大戦の終戦時までで、アメリカ公立図書館や司書職の性格を決定した時代と考えてよい。まず「最善の読書」についてはシカゴ世界博に出品した「モデル図書館」（Model Library）が体現しているが、その選択は外部専門家に委ねている。またモデル図書館が示す図書は「良い」読書を導き、それは「良い」社会的行動を導く。これはデューイのいう「図書館の信条」に他ならない。しかしシカゴ大会が象徴するように「最善の読書」はたいして議論されず、「最低のコスト」に論議が集まったのである。またこの大会は「権威」（資料の価値の決定）や「性格」（全体としての図書館員のプロフィール）ではなく、「インスティチューション」（図書館の経営やサービス）と「専門技量」（分類や目録など）をもっぱら重視した。図書館は外部専門家が選択した「最善の読書」へのアクセスを容易にするために、「インスティチューション」と「専門技量」を使わねばならない。これらはカーネギーの寄付によって重要性を増し、同時に司書職の女性化も生じてきた。なお児童サービスはほとんどが女性であったが、ここでは『チルドレンズ・カタログ』にみられるように、外部専門家が「権威」を有するのではなく、女性図書館員が資料の価値の評価、すなわち「権威」を行使した。第1次世界大戦が始まる頃には、アメリカの図書館界は専門職としての管轄領域を主張するようになる。図書館員は「中立的」なサービスによって「最善の読書を最低のコストで最大多数の人に」提供するということである。しかしこの「中立性」は第1次世界大戦への参戦によって消え去るとともに、典型的な駐屯地図書館では蔵書の3分の

2がフィクションであった。

1918年から1945年の時代では、まず第1次世界大戦で通俗書を軍人に提供したがために、「害のない」通俗書を受け入れるようになった。そのため「最善の読書」の提供という圧力は軽減されたのである。図書館員は「最大多数の人」へのサービスの拡大と「最低のコスト」でのサービスの提供をいっそう重視することになる。また利用者はいまや参考サービスや参考資料を利用して、新しい知識を創造するための事実を調べることもできた。参考サービスを利用するグループは、黒人や子どもや女性よりも大きな力を持っていたので、参考サービスが提供する情報は優越的な地位を占めることになった。要するに、「最善の読書を最低のコストで最大多数の人に」の背後にある読書イデオロギーは第1次世界大戦後に修正、緩和され、また模範とすべき図書館サービスは1920年代に拡張された参考サービスによる「有用な」（したがって優越的な）情報を包み込むようになっていった。そして1930年代にヨーロッパで生じた出来事が司書職の責任範囲をさらに拡大した。アメリカ図書館協会は1939年に「図書館の権利宣言」を採択し、修辞上であっても知的自由の防衛を司書職の責務として取り込んだのである。これは通俗書の社会的利益を正当化するとともに、読書研究から目をそらせる役割も果たした。また大恐慌の時代、図書館は次第に連邦政府が提供する機会を活用できるようになっていった。なお第2次世界大戦とともに図書館界全体が軍隊へのサービスに動いたのである。

以上が第1期と第2期についてのウィーガンドの解釈である。このようにウィーガンドは、「最善の読書を最低のコストで最大多数の人に」といういわば公立図書館の目的を、「権威」、「インスティチューション」、「専門技量」、「性格」といった要素との関係でみているということになる。これはウィーガンドの図書館史研究の一番の特徴と考えてよい。

論文「20世紀の図書館・図書館学を振り返る」は、そうした視点でもって通史を素描したものと考えられるが、素朴な疑問点も提出されるであろう。まず1893年を時代区分とした点である。いわゆる「革新主義の時代」にあてはめようとするとウィーガンドのような時代区分になるであろうが、ウィーガンドがいう「インスティチューション」や「専門技量」の内実を示すサービス、技術、手立ては、それ以前から整えられてきている。1893年を象徴的な意味で使うのならともかく、図書館史の時代区分として果たして適当か否かという問題が生じるであろう。またウィーガンドはもっぱら図書館外部の人やグループが「権威」（図書の評価）を行使してきたと述べ、図書館員は「インスティチューション」と「専門技量」に埋没してきたという。おそらくマクロにみるとウィーガンドの解釈は正しいのであろう。しかし図書館利用者との関係でみると、図書の評価という意味での「権威」は単に児童図書館員だけでなく、図書館員が行ってきたのではないか。例えば1920年代の読書相談サービスは徹底的な対個人サービスであり、そこでは図書館員が図書館利用者個人を対象に、図書の評価を行い、最もその利用者に適する「最善の図書」（最適書）を提供するように努めた。図書の評価という意味での「権威」は唯一ではなく、階層状になっていると把握する方が、豊かな図書館史解釈を導くように思われる。

また私見によると、ウィーガンドは「権威」、「インスティチューション」、「専門技量」、「性格」を取り上げるが、そうした4つの構造的な結びつき、あるいは結びつきの変化については、

いっそうの考察が必要だと思われる。アメリカの研究でも、ウィーガンドの歴史解釈は常に引用されるのであるが、この４つの要素自体については本格的に取り上げられた論考はなく、視点や方法論の観点からの研究が待たれる。

おわりに

ウェイン・A.ウィーガンドの図書館史研究の全体像を探ってきたのだが[81]、それは多分にウィーガンドを中心とする第4世代の図書館史研究の特徴を示すことでもあり、以下に箇条書きにしておく。

- 社会と図書館との関係、実際の図書館界や図書館のなかで働いている顕在的、潜在的な複雑な作用を解明していく方向。
- 階級、ジェンダー、人種など批判理論の重視と当然とされてきた考えの捉え返し。
- 図書館という場が実際の利用者にどのように作用してきたのかの解明。
- 場としての図書館、建物としての図書館（備品、装飾などを含む）が示す物理的、実際的、抽象的な意味の解明。
- 従来の制度的な図書館史研究からの脱却と学際的研究（プリント・カルチャー、アメリカ文化史、アメリカ研究など）への展開。
- 図書館から利用者を捉えるのではなく、利用者の生活の中での図書館を考えるという視点。
- 社会的行為としての読書の重視とそうした読書に果たす図書館の意味の解明。
- アーカイヴの資料や1次史料の活用、さらにはオーラル・ヒストリーの活用。

さらに図書館史研究が学際的な研究方向に向かうに際して、社会科学や人文科学で共通に活用されている理論や解釈の枠組みが、図書館研究や図書館史研究に適用されるようになってきた。ユルゲン・ハーバーマス（Jurgen Habermas)、ロバート・D.パットナム（Robert D. Putnam)、レイ・オールデンバーグ（Ray Oldenburg)、ミシェル・フーコー、ピエール・ブルデュー（Pierre Bourdieu)、アントニオ・グラムシ（Antonio Gramci)、ロジェ・シャルチェなど、多くの研究者の理論や視点、解釈が用いられている[82]。

最後に第4世代とそれまでの世代の違いをキーワードで示しておきたい。第3世代までの図書館史研究の特徴をキーワードで示すと以下のようであった。

- ボストン公立図書館、大都市の大規模図書館（中央館)、男性のエリート館長や図書館指導者、白人中産階級、ニューイングランドを中心に中部大西洋岸、図書館側からの視点、活字文献資料中心の実証的研究、刊行された文献の重視、図書館界内での閉じられた研究。

一方、第4世代の研究のキーワードは次のようにまとめることができよう。

- 階級、ジェンダー、人種、民族的マイノリティ、中西部・西部・南部、小規模図書館や分館、女性図書館員、図書館利用者の生活の中での図書館、活字文献資料以外の重視（図像、建物や備品、オーラルヒストリー)、1次史料の重視、プリント・カルチャー、理論の適用、場としての図書館。

こうした特徴を有する第4世代は、第2世代、第3世代の解釈を常に意識しながら、図書館史の再構築に向かって、各論の研究を続けている。たしかに包括的な業績はだされていないが、

研究の広がり、問題意識の明確化、研究の質の深まりなどが実感される。

注

以下でディー・ギャリソンを除く第3世代までの学説史を示している。川崎良孝「5　終論：史学史的検討」『アメリカ公立図書館成立思想史』日本図書館協会, 1991, p. 209-269; 「アメリカ公立図書館史の解釈をめぐって」日本図書館学会研究委員会編『図書館学の研究方法』日外アソシエーツ, 1982, p. 118-148; 「アメリカ図書館史学の史的考察 (1)」『図書館界』vol. 33, no. 2, 1981, p. 41-55; 「アメリカ図書館史学の史的考察 (2)」『図書館界』vol. 33, no. 4, 1981, p. 171-183; 「アメリカ図書館史学の史的考察(3)」『図書館界』vol. 33, no. 5, 1982, p. 217-229; 「アメリカ図書館史学の史的考察(4)」『図書館界』vol. 34, no. 2, 1982, p. 164-175; 「アメリカ図書館史学の史的考察(5)」『図書館界』vol. 34, no. 6, 1983, p. 360-371; 「アメリカ図書館史学の史的考察(6)」『図書館界』vol. 35, no. 2, 1983, p. 54-68.

1) Josiah Quincy, *The History of the Boston Athenaeum, with Biographical Notices of its Deceased Founders,* Cambridge, MA, Metcalf and Co., 1851.
2) Gwladys Spencer, *The Chicago Public Library, Origins and Backgrounds,* University of Chicago Press, 1943.
3) Jesse H. Shera, *Foundations of the Public Library: The Origins of the Public Library Movement in New England, 1629-1855,* University of Chicago Press, 1949 [『パブリック・ライブラリーの成立』川崎良孝訳, 日本図書館協会, 1988].
4) Sidney Ditzion, *Arsenals of a Democratic Culture: A Social History of the American Public Library Movement in New England and the Middle States from 1850-1900,* Chicago, American Library Associaiton, 1947 [『民主主義と図書館』川崎良孝・森耕一・高島涼子訳, 日本図書館研究会, 1994].
5) Michael H. Harris, "The Purpose of the American Public Library: A Revisionist Interpretation of History," *Library Journal,* vol. 98, 1973, p. 2509-2514.
6) Dee Garrison, *Apostles of Culture: The Public Librarian and American Society, 1876-1920,* New York, Macmillan Information, 1979 [『文化の使徒：公共図書館・女性・アメリカ社会, 1876-1920年』田口瑛子訳, 日本図書館研究会, 1996].
7) Wayne A. Wiegand, *The Politics of an Emerging Profession: The American Library Association, 1876-1917,* Westport, CT, Greenwood Press, 1986 [『司書職の出現と政治：アメリカ図書館協会1876-1917年』川崎良孝・吉田右子・村上加代子訳, 京都大学図書館情報学研究会発行, 日本図書館協会発売, 2007].
8) Wayne A. Wiegand, *An Active Instrument for Propaganda: The American Public Library during World War I,* New York, Greenwood Press, 1989.
9) Wayne A. Wiegand, *Irrepressible Reformer: A Biography of Melvil Dewey,* Chicago, American Library Associaiton, 1996 [『手に負えない改革者：メルヴィル・デューイの生涯』川崎良孝・村上加代子訳, 京都大学図書館情報学研究会発行, 日本図書館協会発売, 2004].
10) Abigail Van Slyck, *Free to All: Carnegie Libraries and American Culture, 1890-1920,* University of Chicago Press, 1995 [『すべての人に無料の図書館：カーネギー図書館とアメリカ文化 1890-1920年』川崎良孝・吉田右子・佐橋恭子訳, 京都大学図書館情報学研究会発行, 日本図書館協会発売, 2005]. ヴァンスリックの図書館史研究については以下を参照。吉田右子・川崎良孝「アビゲイル・

ヴァンスリックと図書館史研究」『図書館界』vol. 61, no. 1, 2009, p. 2-15.

11) Christine Pawley, *Reading on the Middle Border: The Culture of Print in Late-Nineteenth-Century Osage, Iowa,* University of Massachusetts Press, 2001.

12) Edward A. Goedeken, "Asessing What We Wrote: A Review of the *Libraries and Culture* Literature Review, 1967-2002," *Libraries and Culture,* vol. 40, no. 3, 2005, p. 261.

13) Wayne A. Wiegand, "American Library History Literature, 1947-1997: Theoretical Perspectives," *Librareis and Culture,* vol. 35, no. 1, 2000, p. 5

14) Wayne A. Wiegand, "The Lliterature of American Library History, 1977-1978," *Journal of Library History,* vol. 14, 1979, p. 320; "The Literature of American Library History, 1979-1980," *Journal of Library History,* vol. 17, 1982, p. 291-292; "The Literature of American Library History, 1981-1982," *Journal of Library History,* vol. 19, 1984, p. 390; "The Literature of American Library History, 1983-1984," *Journal of Library History,* vol. 21, 1986, p. 723.

15) Wayne A. Wiegand, *Politics of an Emerging Profession: The American Library Association, 1876-1917, op.cit.*; Wayne A. Wiegand, *An Active Instrument for Propaganda: American Public Libraries During World War I , op.cit.;* Wayne A. Wiegand, *Irrepressible Reformer: A Biography of Melvil Dewey, op.cit.*

16) Wayne A. Wiegand, "Perspectives on Library Education in the Context of Recently Published Literature on the History of Professions," *Journal of Education for Library and Information Science,* vol. 26, no. 4, 1986, p. 267-280.

17) A.M. Carr-Saunders and P.A. Wilson, *The Professions,* Oxford University Press, 1933.

18) Talcott Parsons, "Professions," *International Encyclopedia of the Social Sciences,* New York, Free Press, vol. 12, p. 536-547; Talcott Parsons, *Essays in Sociological Theory: Pure and Applied,* Glencoe, IL, Free Press, 1949.

19) Harold Wilensky, "The Professionalization of Everyone?" *American Journal of Sociology,* 70, 1964, p. 137-158. なおウィンター（Michael F. Winter）はウィレンスキーの理論を「特性理論の『自然史』版」と呼んでいる。マイケル・F.ウィンター『技量の統制と文化：司書職の社会学的理解に向けて』川崎良孝訳，京都大学図書館情報学研究会発行，日本図書館協会発売，2005, p. 52.

20) Magali Larson, *The Rise of Professionalism: A Sociological Analysis,* University of California Press, 1977.

21) Andrew Abbot, "Perspectives on Professionalization," Paper presened at the Annual Meeting of the Organization of American Historians, April, 1985, Minneapolis, MN; Paul Starr, *The Social Transformation of American Medicine,* New York, Basic Books, Inc., 1982. ウィーガンドが専門職の社会学を参考に、図書館や図書館史を考察するこうした枠組みを発表したのは以下の論文である。Wayne A. Wiegand, "Perspectives on Library Education in the Context of Recently Published Literature on the History of Professions," *op.cit.*, 1986, p. 267-280. したがってこのウィーガンドの1986年論文刊行時はアボットの以下の著作およびウィンターの著作はまだ発行されていなかった。Andrew Abbot, *The System of Professions: An Essay on the Division of Expert Labor,* University of Chicago Press, 1988; Michael F. Winter, *The Culture and Control of Expertise: Toward a Sociological Understanding of Librarianship,* Westport, CT, Greenwood Press, 1988 [『技量の統制と文化』*op.cit.*].

22) Barbara Melosh, *The Physician's Hand: Work Culture and Conflict in American Nursing,* Philadelphia, Temple University Press, 1982; Thomas H. Haskell, ed., *The Authority of Experts: Studies in History and Theory,* Indiana University Press, 1984.

23) Paul Starr, *op.cit.,* p. 9-10.

24) *ibid.,* p. 13.

25) *ibid.*

26) ウィーガンドは繰り返し、この4つの要素を指摘し、図書館学教育や図書館史研究にさまざまな解釈や提言をしている。その主要な文献を以下に示しておく。"Perspectives on Library Education in the Context of Recently Published Literature on the History of Professions," *op.cit.,* 1986; "The Socialization of Library and Information Science Students; Reflections on a Century of Formal Education for Librarianship," *Library Trends,* 34, 1986, p. 383-399; "The Role of the Library in American History," *The Bowker Annual of Library and Book Trade Informaition,* 33, 1988, p. 69-76; "The Development of Librarianship in the United States," *Libraries and Culture,* vol. 24, no. 1, 1989, p. 99-108; "The Politics of Cultural Authority," *American Libraries,* January 1998, p. 80-82; "The Structure of Librarianship: Essay on an Information Profession," *Canadian Journal of Information and Library Science,* vol. 24, no. 1, 1999, p. 17-37; "Tunnel Vision and Blind Spots: What the Past Tells Us about the Present; Reflections on the Twentieth-Century History of American Librarianship," *Library Quarterly,* vol. 69, 1999, p. 1-32 [川崎良孝訳「第1章：20世紀の図書館・図書館学を振り返る：狭い視野と盲点」川崎良孝編著『図書館・図書館研究を考える：知的自由・歴史・アメリカ』京都大学図書館情報学研究会発行，日本図書館協会発売，2001, p. 3-44]; "American Library History Literature, 1947-1997: Theoretical Perspectives," *op.cit.* ; "Broadening Our Perspectives," *Library Quarterly,* vol. 73, 2003, p. v-x; "The Rich Potential of American Public School Library History: Research Needs and Opportunities for Historians of Education and Librarianship," *Libraries and the Cultural Records,* vol. 42, no. 1, 2007, 57-74; "Libraries and Invention of Information," Simon Eliot and Jonathan Rose, eds., *A Companion to the History of the Book,* Chichester, West Sussex, Wiley-Blackwell, 2007, p. 531-543.

27) Wayne A. Wiegand, "the Literature of American Library History, 1981-1982," *op.cit.,* 1984, p. 417.

28) Wayne A. Wiegand, "the Literature of American Library History, 1983-1984," *op.cit.,* 1986, p. 740.

29) Wayne A. Wiegand, "the Literature of American Library History, 1987-1988," *Libraries and Culture,* vol. 25, 1990, p. 542-574.

30) Wayne A. Wiegand, "the Literature of American Library History, 1985-1986," *Libraries and Culture,* vol. 23, 1988, p. 332.

31) Ronald J. Zboray and Mary Saracino Zboray, *A Handbook for the Study of Book History in the United States,* Washington, D.C., Center for the Book, Library of Congress, 2000, p. 4.

32) Robert Darnton, *The Kiss of Lamourette: Reflections in Cultural History,* New York, Norton, 1990 [『歴史の白昼夢：フランス革命の18世紀』海保眞夫・坂本武訳，河出書房新社，1994. 87頁の図を参照].

33) Ronald J. Zboray and Mary Saracino Zboray, *A Handbook for the Study of Book History in the United States, op.cit.,* p. 73-74.

34) Wayne A. Wiegand, "Library History Research in the United States," *Libraries and Culture,* vol. 25, 1990, p. 103-114.

35) *ibid.,* p. 107-108.

36) *ibid.,* p. 109.

37) 1990年から1996年にかけて、ウィーガンドは以下のようなデューイ関係の学術論文を発表している。"Melvil Dewey and the Origins of the New York Library Association," *Bookmark,* 48, 1990, p. 81-84; "Catalog of 'A.L.A.' Library (1893): Origins of a Genre," in Delmus Williams, et al, eds., *For the Good of the Order: Essays in Honor of Edward G. Holley,* Greenwich, CT, JAI Press, 1994, p. 71-87; " 'Jew Attack': The Story behind Melvil Dewey's Resignation as New York State Librarian in 1905," *American Jewish History,* 83, 1995, p. 359-379; "Wresting Money from the Canny Scotsman: Dewey's Design on Carnegie's Millions, 1902-1906," *Libraries and Culture,*

vol. 32, no. 2, 1996, p. 380-393; この期の文献展望や編纂には以下がある。"The Literature of American Library History, 1987-88," *op.cit.,* 1990; Wayne A. Wiegand, ed., *Supplement to the Dictionary of Ameircan Library Biography,* Englewood, CO, Libraries Unlimited, 1990; Wayne A. Wiegand and Donald G. Davis, Jr., eds., *Encyclopedia of Library History,* New York, Garland Publishing, 1994.

38) Wiegand, Wayne A. "Introduction: Theoretical Foundations for Analyzing Print Culture as Agency and Practice in a Diverse Modern America," in James P. Danky and Wayne A. Wiegand, eds., *Print Culture in a Diverse America,* University of Illinois Press, 1998, p. 8.

39) James P. Danky and Wayne A. Wiegand, eds., *ibid.*

40) *ibid.*; Wayne A. Wiegand, "Out of Sight, Out of Mind: Why Don't We Have Any Schools of Library and Reading Studies," *Journal of Education for Library and Information Science,* vol. 38, no. 4, 1997, p. 314-326; "MisReading LIS. Education," *Library Journal,* June 15, 1997, p. 36-38.

41) Harvey Graff, *The Literacy Myth: Literacy and Social Structure in the Nineteenth-Century City,* New York, Academic Press, 1979; Elizabeth L. Eisenstein, *The Printing Press as an Agent of Change: Communications and Cultural Transformations in Early Modern Europe,* 2 vols., Cambridge University Press, 1979.

42) Robert Darnton, *The Great Cat Massacre and Other Episodes in French Cultural History,* New York, Basic Books, 1984 [『猫の大虐殺』海保真夫・鷲見洋一訳, 岩波書店, 1986]; Ronald Zboray, *A Fictive People: Antebellum Economic Development and the American Reading Public,* Oxford University Press, 1993; Cathy Davidson, *Revolution and the Word: The Rise of the Novel in America,* Oxford University Press, 1984; リュシアン・フェーブル、アンリ=ジャン・マルタン『書物の出現(上)(下)』関根素子・長谷川輝夫ほか訳, 筑摩書房, 1985; ロジェ・シャルチェ『書物の秩序』長谷川輝夫訳, ちくま学芸文庫, 1996.

43) Stanley Fish, *Is There a Text in This Class?: The Authority of Interpretive Communities,* Harvard University Press, 1980 [『このクラスにテクストはありますか』小林昌夫訳, みすず書房, 1992]; Wolfgang Iser, *The Act of Reading: A Theory of Aesthetic Response,* Johns Hopkins University Press, 1978 [『行為としての読書：美的作用の理論』轡田収訳, 岩波書店, 1982]; Louise Rosenblatt, *Literature as Exploration,* New York, Appleton, 1938 (5th ed., New York, Modern Language Association, 1995).

44) Jonathan Boyarin, ed., *The Ethnography of Reading,* University of California Press, 1993; Elizabeth Long, "Textual Interpretation as Collective Action," in *ibid.,* p. 180-211.

45) Barbara Herrnstein Smith, *Contingencies of Value: Alternative Perspectives for Critical Theory,* Harvard University Press, 1988; Jane Tompkins, *West of Everything: Inner Life of Westerns,* New York: Oxford University Press, 1993; Janice A. Radway, *Reading the Romance: Women, Patriarchy, and Popular Literature,* University of North Carolina Press, 1984.

46) なおウィーガンドが研究書でプリント・カルチャー研究およびその組織的な研究体制について説明したのは以下が最初である。 Wayne A. Wiegand, "Introduction: Theoretical Foundations for Analyzing Print Culture as Agency and Practice in a Diverse Modern America," *op.cit.,* 1998.

プリント・カルチャーへの図書館史研究者の参画は従来の図書館史研究と無縁の領域への展開ではないものの、図書館史研究が置かれている厳しい現実をも意識している。まずは図書館史研究にたいする図書館学大学院での位置づけの低下が関係する。位置づけの低下という危機感との関わりで、図書館史研究の位置づけや方向を模索するという方向がでてきた。これについては、1998年にイギリスの代表的な図書館史研究者アリステア・ブラックが発表した「情報と近代：図書館史の失墜と情報史」(Alistair Black, "Information and Modernity: The History of Information and the Eclipse of Library History," *Library History,* vol. 14, 1998, p. 39-45) を契機に、ドナルド・G.デイヴィス・ジュニア

が反論と展開を行った論文「図書館史の将来：図書館史の将来についてのブラックのモデルへの批判と、さらなる展開」などが参考になる（Donald G. Davis, Jr., and Jon Arvid Aho, "Whither Library History?: A Critical Essay on Black's Model for the Future of Library History, with Some Additional Options," *Library History,* vol. 17, 2001, p. 21-37; Black Alistair, "A Response to 'Whither Library History?'," in *ibid.,* p. 37-39)。要するに図書館史研究の位置づけであり、従来の図書館史研究を続ける、情報史として再構築する、歴史学に組み込む、文化史やアメリカ研究に位置づける、プリント・カルチャー研究に位置づけるといった、いわば図書館史研究の路線論争になる。

いま1つは、1980年代から図書館学校の閉鎖が相つぎ、シカゴ大学（1991）やコロンビア大学（1992）、カリフォルニア大学バークレー校（1994）など図書館情報学研究を先導してきた図書館学校が相次いで廃止されたことに関係する（図書館学校の閉鎖については以下を参照。Marion Paris, "Why Library Schools Fail," *Library Journal,* vol. 115, 1990, p. 38-42; Marion Paris, *Library School Closings: Four Case Studies,* Metuchen, NJ, Scarecrow Press, 1988; Larry J. Ostler, Therrin C. Dahlin, and J.D. Willardson, *The Closing of American Library Schools: Problems and Opportunities,* Westport, CT, Greenwood Press, 1995)。その理由の1つとして、図書館学校が当の大学内で孤立していたという事実がある。また上述のように、図書館情報学大学院のカリキュラムが情報や情報技術に傾斜し、図書館史研究の位置の低下という状況があった。プリント・カルチャー研究への関心の増大と、このような状況を受けて、1991年にSHARP（Society for the History of Authorship, Reading, and Publishing）が多くの図書館史関係者も参加して発足した。またプリント・カルチャー研究への対応と学内外での図書館史研究の位置づけの強化と展開を意図して、本稿で示したように1992年には「現代アメリカ・プリント・カルチャー史研究センター」が設置された。発足に際してはウェイン・A.ウィーガンドとカール・カエスル（Carl F. Kaestle）を中心とするウィスコンシン大学の教員、それにジェイムズ・P.ダンキー（James P. Danky）を中心とするウィスコンシン州歴史協会の図書館員が、中核的な役割を果たした。このように、プリント・カルチャーや広範な文化史、アメリカ研究への展開には、研究上の意味とともに政治的な意味もあった。

47) ウィーガンドは例えば以下でプリント・カルチャーへの展開を提言している。"Broading our Perspectives," *op.cit.;* Wayne A. Wiegand and John Carlo Bertot, "New Directions in LQ's Research and Editorial Philosophy," *Library Quarterly,* vol. 73, no. 3, 2003, v-ix; Wayne A. Wiegand, "Critiquing the Curriculum," *American Libraries,* January 2005, p. 58-59; なお場としての図書館研究については、ウィーガンドの主張以前に下記の研究論文がある。Gloria J. Leckie, Jeffrey Hopkins, "The Public Place of Central Libraries: Findings from Tronto and Vancouver," *Library Quarterly,* vol. 72, 2002, p. 326-372. またヴァンスリックの業績は場としての図書館に関する歴史研究である。Abigail Van Slyck, *Free to All: Carnegie Libraries and American Culture, 1890-1920, op.cit.* [『すべての人に無料の図書館：カーネギー図書館とアメリカ文化　1890-1920年』*op.cit.*].

48) Wayne A. Wiegand, *Politics of an Emerging Profession: The American Library Association, 1876-1917, op.cit.,* 1986 [『司書職の出現と政治』*op.cit.*];『司書職の出現と政治』に結びつくウィーガンドの雑誌論文が以下である。"American Library Association Executive Board Members, 1876-1917: A Collective Profile," *Libri,* 31, 1981, p. 22-35; "Herbert Putnam's Appointment as Librarian of Congress," *Library Quarterly,* vol. 49, 1979, p. 255-282; "Melvil Dewey and the American Library Association, 1876-1907," in Gordon Stevenson and Judith Kramer-Greene, eds., *Melvil Dewey: The Man and the Classification,* Albany, NY, Forest Press, 1983, p. 101-128; "The Wayward Bookman: The Decline, Fall and Historical Obliteration of an ALA President, Part I," *American Libraries,* vol. 8, 1977, p. 134-137; "Part II," *American Libraries,* vol. 8, 1977, p. 197-200; Wayne A. Wiegand and Geri Greenway, "A Comparative Analysis of the Socioeconomic and Professional Characteristics of American Library Association Executive Board and Council Members, 1876-1917," *Library Research,* 2, 1981, p. 309-325.

49) なおウィーガンドは下記の単行書を刊行しているが、影響力の観点から本章では取り上げない。*The History of a Hoax: Edmund Lester Pearson, John Cotton Dana, and the Old Librarian's Almanack,* Pittsburgh, Beta Phi Mu, 1979.
50) ウィーガンド『司書職の出現と政治』*op.cit.*, ix.
51) *ibid.*, 293.
52) George Burwell Utley, *Fifty Years of the American Library Association,* Chicago, American Library Association, 1926.
53) Edward G. Holley, *Raking the Historic Coals: The A.L.A. Scrapbook of 1876,* Pittsburgh, Beta Phi Mu, 1967.
54) Peggy Sullivan, *Carl H. Milam and the American Library Association,* New York, H.W. Wilson, 1976.
55) Dennis V. Thomison, *A History of the American Library Assocaition, 1876-1972,* Chicago American Library Association, 1978.
56) ウィーガンド『司書職の出現と政治』*op.cit.*, xi.
57) Wayne A. Wiegand, *An Active Instrument for Propaganda: American Public Libraries During World War I, op.cit.,* 1989. 本書に結びつくウィーガンドの雑誌論文が以下である。"British Propaganda in American Public Libraries, 1914-1917," *Journal of Library History,* vol. 18, 1983, p. 237-254; "Oregon's Public Libraries during the First World War," *Oregon Historical Quarterly,* vol. 90, 1989, p. 39-63: "In Service to the State: Wisconsin Public Libraries During World War I," *Wisconsin Magazine of History,* 1989, p. 199-224.
58) Arthur P. Young, *Books for Sammies: The American Library Association and World War I,* Pittsburgh, Beta Phi Mu, 1981. なお研究書とはいいがたいが、下記の図書があることを指摘しておく。Theodore W. Koch, *Books in the War: The Romance of Library War Service,* Boston, Houghton Mifflin, 1919.
59) *Irrepressible Reformer: A Biography of Melvil Dewey, op.cit.,* 1996 [『手に負えない改革者』*op.cit.*]. 以下はウィーガンド自身が簡略に『手に負えない改革者』を一般向けにまとめたものである。"Dewey Declassified: A Revelatory Look at the 'Irrepressible Reformer'," *American Libraries, January* 1996, p. 54-60. 本書に結びつくウィーガンドの雑誌論文などが以下である。『司書職の出現と政治』*op.cit.*; "Catalog of 'A.L.A.' Library (1893): Origins of a Genre," *op.cit.*, 1994; " 'Jew Attack': The Story behind Melvil Dewey's Resignation as New York State Librarian in 1905," *op.cit.*, 1995; "Wresting Money from the Canny Scotsman: Dewey's Design on Carnegie's Millions, 1902-1906," *op.cit.*, 1996; "The "Amherst Method:" The Origins of the Dewey Decimal Classification Scheme," *Libraries and Culture,* vol. 33, no. 2, 1998, p. 174-194; "Melvil Dewey and the American Library Association, 1876-1907," *op.cit.*, 1983.
60) 以下のまとめは下記にもとづいている。吉田右子「書評『手に負えない改革者：メルヴィル・デューイの生涯』」『図書館界』vol. 57, 2005, p. 160-162.
61) ウィーガンド『手に負えない改革者』*op.cit.*, p. 198.
62) *ibid.*, p. 334, 352.
63) *ibid.*, p. 76.
64) *ibid.*, p. 63.
65) Grosvenor Dawe, *Melvil Dewey: Seer, Inspirer, Doer,* Lake Placid, NY, Lake Placid Club, 1932.
66) Fremont Rider, *Melvil Dewey,* Chicago, American Library Association, 1944.
67) *ibid.*, p. viii.
68) Fremont Rider, *Melvil Dewey,* Boston, Gregg Press, 1972.
69) Sarah K. Vann, *Melvil Dewey: His Enduring Presence in Librarianship,* Littleton, CO, Libraries Unlimited, 1978. なお伝記とはいえないが下記の論集があるのを指摘しておく。Gordon

Stevenson and Judith Kramer-Greene, eds., *Melvil Dewey: The Man and the Classification, op.cit.*, 1983.

70) 理論の適用に関して、例えばウィーガンドは以下の論文でグラムシの枠組みを適用している。Wayne A. Wiegand, "Main Street Public Library: The Availability of Controversial Materials in the Rural Heartland, 1890-1956," *Libraries and Culture,* vol. 33, no. 1, 1998, p. 127-133; Wayne A. Wiegand, "Collecting Contested Titles: The Experience of Five Small Public Libraries in the Rural Midwest, 1893-1956," *Libraries and Culture,* vol. 40, no. 3, 2005, p. 368-384.

71) 注14の文献に加えて、以下がある。Wayne A. Wiegand, "The Literature of American Library History, 1985-1986," *op.cit.*; "The Literature of American Library History, 1987-1988," *Libraries and Culture, op.cit.*

72) Wayne A. Wiegand, "American Library History Literature, 1947-1997: Theoretical Perspectives?" *op.cit.*, p. 4-43.

73) Sidney Ditzion, "The Research and Writing of Library History," in Conrad H. Rawski, ed., *Toward A Theory of Librarianship: Papers in Honor of Jesse Hauk Shera,* Metuchen, NJ, Scarecrow Press, 1973, p. 55-69; Jesse H. Shera, "The Literature of American Library History," *Library Quarterly,* vol. 15, 1945, p. 1-24; Jesse H. Shera, "The Literature of American Library History," in Shera, Jesse Hauk, *Knowing Books and Men: Knowing Computers, Too,* Littleton, CO, Libraries Unlimited, 1973. p. 124-161.

74) Wayne A. Wiegand, ed., *Leaders in American Academic Librarianship, 1925-1975,* Pittsburgh, Beta Phi Mu, 1983; Wayne A. Wiegand, ed., *Supplement to the Dictionary of American Library* Biography, Englewood, CO. Libraries Unlimited, 1990; Wayne A. Wiegand and Donald G. Davis, Jr., eds., *Encyclopedia of Library History,* New York, Garland Publishing, 1994.

75) ウィーガンドが専門職の社会学を参考に、図書館や図書館史を考察するこうした枠組みを発表したのは以下の論文である。Wayne A. Wiegand, "Perspectives on Library Education in the Context of Recently Published Literature on the History of Professions," *op.cit.*, 1986. その考えは一貫しており、最近の論文は例えば以下である。"The Rich Potential of American Public School Library History: Research Needs and Opportunities for Historians of Education and Librarianship," *op.cit.*, 2007. 詳しくは注26を参照。

76) それは発表された雑誌が単に図書館史研究の専門誌だけではなく、図書館学教育や一般の図書館関係雑誌にだされていることからも理解できる。注26を参照。

77) 現代アメリカ・プリント・カルチャー史センターについては特に以下を参照。Christine Pawley, " "Success on a Shoestring:" A Center for a Diverse Print Culture History in Modern America," *Library Trends,* vol. 56, 2008, p. 705-719.

78) James P. Danky and Wayne A. Wiegand, eds., *Print Culture in a Diverse America, op.cit.*, 1998.

79) ダンキーとウィーガンドを共同編集者（General Editor）として、シリーズ「現代アメリカ・プリント・カルチャー史」（Print Culture History in Modern America）としてウィスコンシン大学出版局が刊行した研究書には例えば以下がある。Paul S. Boyer, *Purity in Print: Book Censorship in America from the Gilded Age to the Computer Age,* 2nd ed., 2002（初版は以下である。*Purity in Print: The Vice-society Movement and Book Censorship in America,* New York, Scribners, 1968）; Dee Garrison, *Apostles of Culture: The Public Librarian and American Society, 1876-1920,* 2nd ed., 2003（初版は以下である。*Apostles of Culture: The Public Librarian and American Society, 1876-1920, op.cit.*, 1979［『文化の使徒：公共図書館・女性・アメリカ社会、1876-1920年』*op.cit.*]); Thomas Augst and Wayne A. Wiegand, eds., *Libraries as Agencies of Culture,* 2002（同書は以下の雑誌を単行書にしたものである。Thomas Augst and Wayne A. Wiegand, guest eds., "The Library as an Agency of Culture," *American Studies,* vol. 42, no. 3, 2001

(entire issue)) ; James P. Danky and Wayne A. Wiegand, eds., *Women in Print: Essays on the Print Culture of American Women from the Nineteenth and Twentieth Centuries,* 2006.

80) Wayne A. Wiegand, "Tunnel Vision and Blind Spots: What the Past Tells Us about the Present; Reflections on the Twentieth-Century History of American Librarianship," *op.cit.* [「20世紀の図書館・図書館学を振り返る：狭い視野と盲点」*op.cit.*]. なお扱った年代が広いという意味では、メソポタミアから現在までを実質的は11頁にまとめた下記の文献があることを指摘しておく。Wayne A. Wiegand, "Libraries and Invention of Information," Simon Eliot and Jonathan Rose, eds., *A Companion to the History of the Book, op.cit.* また以下の最近の業績は1876年から第1次世界大戦までを、階級、ジェンダーを重視して概観している。Wayne A. Wiegand, "The American Public Library: Construction of a Community Reading Institution," Carl F. Kaestle and Janice A. Radway, eds., *Print in Motion: The Expansion of Publishing and Reading in the United States, 1880-1940,* A History of the Book in America, vol. 4, University of North Carolina Press, 2009, p. 431-451.

81) 本稿ではウィーガンドの図書館史研究に焦点をあてたが、現在の公立図書館の研究や公立図書館の在り方については、例えば以下が最も明快にウィーガンドの立場を示している。Wayne A. Wiegand, "Intoroduction: "On the Social Nature of Reading," Diana Tixier Herald, *Genreflecting: A Guide to Popular Reading Interests,* Westport, CT, Libraries Unlimited, 2006, 3-14.

82) こうした理論を適用した図書館学や図書館史の業績を例示しておく。

・フーコーの理論の適用：Gary P. Radford, "Trapped in Our Own Discursive Formations: Toward an Archaeology of Library and Information Science," *Library Quarterly,* vol. 73, no. 1, 2003, p. 1-18; John M. Budd, "Discourse Analysis and the Study of Communication in LIS," *Library Trends,* vol. 55, no. 1, 2006, p. 65-82.

・ブルデューの理論の適用：John M. Budd, "The Library, Praxis, and Symbolic Power," *Library Quarterly,* vol. 73, no. 1, p. 19-32.

・グラムシの理論の適用：Douglas Raber, "Librarians as Organic Intellectuals: A Gramscian Approach to Blind Spots and Tunnel Vision," *Library Quarterly,* vol. 73, no. 1, p. 33-53; Wayne A. Wiegand, "Main Street Public Library: The Availability of Controversial Materials in the Rural Heartland, 1890-1956," *op.cit.*; Wayne A. Wiegand, "Collecting Contested Titles: The Experience of Five Small Public Libraries in the Rural Midwest, 1893-1956," *op.cit.*; Toni Samek, *Intellctual Freedom and Social Responsibility in American Librarianship, 1967-1974,* Jefferson, NC, McFarland, 2003 [『図書館の目的をめぐる路線論争：アメリカ図書館界における知的自由と社会的責任，1967-1974年』川崎良孝・坂上未希訳，京都大学図書館情報学研究会発行，日本図書館協会発売，2003].

・シャルチェの理論の適用：Christine Pawley, *Reading on the Middle Border: The Culture of Print in Late-Nineteenth-Century Osage, Iowa, op.cit.*